白幡

校歌

作詞　寺田　彰司
曲　旧制一高寮歌「アムール川」

一　千秋の雪積もりたる
富士の高嶺の雄姿ぞ
幾万代の後までも
変わらぬ誠の鑑なる

二　奔流百里石をかみ
巌に激しいや増しに
勢加わる利根の水
これ剛健のためしなり

三　あゝ此の山と此の川と
日夕眺むる健男児
自然の示す巨人をば
如何に学ばん習わなん

四　白幡台の雪月花
四季の折々常総の
平野にしるく輝くは
高潔無垢の別天地

五　石段登る六十余
一足ごとに踏みかため
心を鍛え身を練りて
忠良有為の基たてん

課題研究「白幡探究Ⅰ」での光の実験

竜一生が教員役で、小学校への出前授業

豪州研修にて現地生徒に折り鶴を伝授

筑波大研究室にて、実験の方法を研修

目次

会長挨拶 …… 2
校長挨拶 …… 2
平成30年度総会報告 …… 3
平成31年度総会案内 …… 4
同窓会便り …… 5
母校の想い出 …… 8
母校と私の人生 …… 13
トピック① …… 16
トピック② …… 17
同窓会活動 …… 18
特別投稿 …… 19
進路状況 …… 21
読売教育賞受賞 …… 22
SSH活動 …… 23
文系探究活動 …… 25
部活動状況 …… 28
部活動の主な成績 …… 30
定時制保健講話 …… 32
編集後記 …… 32

竜ヶ崎第一高等学校内
白幡同窓会事務局

〒301-0844　龍ケ崎市平畑248
TEL 0297-62-2146　FAX 0297-62-9830
ホームページ　http://www.shirahata.sakura.ne.jp
メールアドレス　shirahatadousoukai@gmail.com
印刷所：倉沢印刷㈱　題字：秋山海堂（中21）
表紙写真：SSH（スーパーサイエンスハイスクール）活動の様子

ご挨拶

白幡同窓会会長
染谷　信洋

白幡同窓会会員の皆様にはご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

日頃本会並びに母校の充実発展のために深いご理解とご支援を賜り心から感謝申し上げます。

本年は四月十四日（土）に同窓会総会を開催しました。今年も在校生の吹奏楽部による演奏と応援団及びチアリーダーのエールで総会を盛り上げていただきました。皆さんには厚く御礼を申し上げます。

さらに今年は本校OBの羽成邦男校長先生をお迎えしてご挨拶をいただきました。

総会においては、今年は役員改選の年でしたが、総会報告にあるようにご承認いただきました。役員一同あらためて気を引き締めてがんばってまいります。また各委員会から活動報告等がありました。詳細につきましては「総会報告」をご覧ください。

五月二十六日には、二〇二〇年の創立百二十周年に向けて記念事業準備委員会が開かれました。会議においては学校、PTA、同窓会が一致協力して事業に当たることが確認されました。

六月の白龍祭には、若い同窓会有志のポロシャツ姿が躍動していました。五十人近い若い人たちの参加はたいへん頼もしい限りでした。

同じ六月三十日に、第一回百二十周年実行委員会が開催され、記念式典、記念講演会、記念誌発行その他の事業計画の骨子が審議されました。

いよいよスタートしましたが、これからは随時会報等で皆様にもお知らせしてまいります。ご支援ご協力をいただくことがあるかもしれません。その折はよろしくお願いをいたします。ただし、今回は募金等をお願いするようなことはいたしません。

七月には今年も「奨励金」を贈呈しましたが、毎年関東大会、全国大会、国体に出場する選手諸君がいることはとても嬉しいことです。

吹奏楽部の皆さんも二十三年ぶりに東関東大会に出場するという快挙を成し遂げました。

野球部の諸君は今夏は残念な結果でしたが、秋の大会では県大会ベスト8の活躍を見せてくれ、来年が楽しみです。

文科省指定のSSHも五年目の完成年度を迎え、すばらしい成果を挙げています。母校竜ヶ崎一高の文武両面にわたる活躍は卒業生にとってもこの上ない喜びです。

八月末、今年はお隣り千葉県の佐倉高校の同窓会を訪問しました。藩校以来二百二十八年、来年は県立高校になってから百二十周年を迎えるそうです。資料館には江戸時代からの貴重な資料に加え、卒業生長嶋茂雄氏ゆかりの品が多数展示されていました。

校長先生出張の上、多忙な状況下、ていねいに対応してくださった同窓会鹿山会の川崎繁事務局長さん、学校の入江順一教務部長さん、高木幸男事務主幹兼事務長さんには心から感謝申し上げます。

わが竜ヶ崎一高も創立百二十周年に向けて具体的に動き出しました。身の引き締まる思いがいたします。

今年は酷暑の夏に加え地震、豪雨、台風等自然災害の多い年でした。新しい年は被災者の方々にも白幡同窓会会員の皆様にとっても幸多き年になるようお祈りいたします。

ご挨拶

校長
羽成　邦男

白幡同窓会染谷信洋会長はじめ会員の皆様には、本校の教育活動に対しまして、格別のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。今年度の人事異動により、鮏川光義前校長の後任として赴任しました、高校30回卒業の羽成邦男です。どうぞよろしくお願いします。

本校は、今年で創立118年を迎えました。2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会の年に、創立120周年を迎えます。この大きな節目に向けて、同窓会・PTA・学校の三者による創立120周年記念事業実行委員会を設置し、準備を進めています。過去の歴史・伝統を顧み、未来に向けて大きく羽ばたく竜一高として、教職員・生徒が一丸となって取り組んでいきたいと思います。

生徒達は、学校創立の精神である「文武両道」の精神を継承し、自分の可能性に挑みながら、意欲的に高校生活を送ることで、変化が激しいこの不確かな時代に果敢に挑戦しようとしています。部活動加入率も8割を超え、放課後には、グラウンドや教室で、仲間と協力し切磋琢磨しながら自分を高めようと積極的に活動している生徒達の姿があります。生徒には、勉強だけではなく、部活動、学園祭や体育祭の学校行事を通して、人として成長していってくれることを期待しています。

部活動の運動部では、3月の全国高等学校選抜ライフル射撃大会で個人優勝を果たし、本校選手が3年連続日本一に輝くという素晴らしい結果を生みました。その後の全国大会や関東大会でも団体・個人で上位入賞を果たし、素晴らしい活躍をしています。また、陸上部、ソフトテニス部、野球部なども日頃の練習の成果を存分に見せてくれています。こうした経験は、生徒達にとっては大きな自信となり、お互いを高めていこうとする雰囲気を作り上げています。文化部では、吹奏楽部が茨城県高等学校吹奏楽コンクール大会B部門において金賞を獲得し、23年ぶりに東関東大会出場を果たしました。放課後音楽室から聞こえてくる演奏は、生徒達の吹奏楽への思いを感じさせてくれます。書道部も8月に長野県で開催された全国高等学校総合文化祭に県代表作品として出展するなど様々な展覧会等で入選しております。

進路においては、昨年度は旧帝大を含む国公立大学に121名、難関早慶大学をはじめとする私立大学に566名が合格しました。飛龍館に

は、大学合格を目指す3年生の真剣な姿がいつもあります。また、平成26年度に文部科学省から指定を受けた「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」も今年で5年目を迎え、まとめの年になりました。6月には、龍ケ崎市文化会館において、運営指導委員の大学関係者、地元の教育関係者や同窓会、保護者の皆さんの前で、生徒達は日頃の研究成果を堂々と発表することができました。自分たちで研究テーマを設定し、課題を解決して行こうとする生徒達の姿は、将来の科学の世界を担おうとする頼もしいものでもあります。

一方、定時制においても、「キャリア・サポートプラン」でのキャリアセミナーを実施するなど、一層のキャリア教育の充実を図っています。

本校としましては、これまでの歴史と伝統の中で培ってきたことを大切にしながら、今後も地域に根ざし、生徒の知的好奇心を喚起し、人としてのあるべき姿の育成を目指していきたいと思います。その上で、答えのない課題にも生徒が怯むことなく挑戦し、新しい時代が求めるリーダーとなる人材を育てるべく、教育活動を展開していきたいと思います。

結びに、白幡同窓会の皆様には、今後とも本校の教育活動にご支援いただくとともに、皆様のご多幸とご活躍をご祈念申し上げてご挨拶といたします。

総会報告

平成三十年度の白幡同窓会総会が四月十四日に竜一高体育館で開催されました。開会の言葉に続き、応援団とチアリーダーの先導により出席者全員で校歌と応援歌を斉唱しました。そして恒例となった吹奏楽部による演奏披露がありました。出席者はアイガーデン下平での懇親会を含めて百三十余名でした。今年度の招待学年は高校十一回、三十六回、五十一回、六十一回と定時制十七回、三十二回、四十七回、五十七回でした。

審議・報告事項は次の通りです。

一　平成二十九年度事業報告・決算報告

二　平成二十九年度会計監査報告

三　平成三十年度事業案・予算案

四　学校概況報告（進路・部活動）

後日、総会に出席された旧制中学四十回の藤沢宏至様より、事務局宛に次のような短歌を書いたお葉書をいただきました。この紙面にてご紹介させていただきます。

「迸る　青春眩し　応援の
白い手袋　宙を舞い刺す」

【本部役員】

会　長　染谷　信洋（高15）
副会長　小倉　培夫（高20）
副会長　関口　広行（高26）
副会長　大和佐知雄（高28）
監　事　宮本　正俊（高10）
監　事　山田　實（高26）
顧　問　野口武太郎（中40）
顧　問　齋藤　佳郎（高8）
顧　問　横須賀英明（高10）

【校外幹事】

幹事長　倉持　正男（高27）
副幹事長　小嶋　豊（高10）
副幹事長　木野内昭治（高13）
幹　事　服部　俊夫（高25）
篠塚　文男（高28）
横田　久（高28）
櫻井　篤美（高29）
赤塚　誠（高30）
大野　雅之（高30）
大野　雅彦（高31）
小嶋　吉浩（高31）
福田　道義（高31）
本田　仁子（高31）
山崎　睦（高31）
宮本　順紀（高32）
有川　保（高33）
霜村　裕通（高33）
磯山　佳美（高34）
海田磨起代（高36）

※校内幹事は十八名です。

平成29年度白幡同窓会収支決算書

収入総額 10,498,308円　支出総額 4,491,363円　差引残額 6,006,945円（次年度へ繰越）

（単位：円）

（収入の部）

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較 増	比較 減	摘要
1 繰越金	5,598,674	5,598,674			平成28年度より繰越 内訳　定期③　1,254,659円　水戸信用金庫 会計用　4,344,015円　常陽銀行（普）
2 入会金	1,770,000	1,758,000		12,000	全日制　6,000円×274名　＝1,644,000円 定時制　6,000円×（13+6）名＝114,000円
3 協力金	2,900,000	3,124,000	224,000		ゆうちょ銀行扱い分（29.3.7～30.3.6）652件 1,382,000円 ｺﾝﾋﾞﾆｴﾝｽｽﾄｱ入金分（29.3.7～30.3.6）867件 1,734,000円 学校へ持参　4件 8,000円
4 雑収入	1,326	17,634	16,308		高19回～34回音楽部OB・OG様（8,500円）寄付 名簿販売代　9,000円 定期預金利息　106円，普通預金利息　28円
合計	10,270,000	10,498,308	228,308		

（支出の部）

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較 増	比較 減	摘要
1 事務費	1,010,000	715,227		294,773	
1 消耗品費	10,000	26,600	16,600		定期残高証明書，事務消耗品代等
2 支払手数料	200,000	193,573		6,427	ゆうちょ銀行扱い分（29.3.7～30.3.6）手数料 74,730円 ｺﾝﾋﾞﾆｴﾝｽｽﾄｱ入金分（29.3.7～30.3.6）手数料 118,843円
3 印刷通信費	350,000	335,017		14,983	総会案内用往復葉書・宛名ラベル代等
4 広報費	250,000	46,082		203,918	ホームページレンタルサーバー利用料等
5 旅費交通費	200,000	113,955		86,045	役員会交通費等
2 事業費	4,220,000	3,729,437		490,563	
1 総会費	150,000	73,066		76,934	出席者名札ケース代等総会経費
2 会報発行費	2,500,000	2,479,452		20,548	会報29号印刷代（597,780円）， 会報郵送代（1,881,672円）
3 会議費	170,000	88,725		81,275	役員会等経費
4 招待学年記念品費	0	0			
5 卒業記念品費	200,000	160,775		39,225	卒業証書ファイル購入代
6 部活動奨励金等	700,000	485,000		215,000	※20,000円+5,000円×出場人数（10万円限度） 関東（陸上部，射撃部，ｿﾌﾄﾃﾆｽ，水泳，卓球） 全国（射撃，ソフトテニス，書道）
7 学校行事補助	300,000	242,419		57,581	SSH関連事業経費，高大連携経費等
8 国際交流基金	200,000	200,000			国際交流会計へ補助（29年度～31年度）
3 慶弔費	100,000	0		100,000	
4 基金積立金	2,000,000	0		2,000,000	普通預金に積立用残金がないため積立見送り
5 予備費	2,940,000	46,699		2,893,301	白龍祭参加経費（餅つき）
合計	10,270,000	4,491,363		5,778,637	

創立 120 周年記念事業（途中経過報告）

平成30年10月13日に創立120周年記念事業第２回実行委員会が開かれました。記念事業に関しては、昨年の10月、校内に準備委員会を立ち上げ、組織や事業計画等について検討されました。その結果、学校として記念事業を行う方向で準備が進められ、今年の５月には実行委員会設立準備委員会が開かれ、組織案や審議事項などが確認されました。６月に第１回実行委員会が開催され、白幡同窓会の染谷信洋会長を実行委員長とした創立120周年記念事業がスタートしました。

第２回実行委員会までに審議された事項等について、途中経過報告としてお知らせします。

１　記念事業実施団体等について

（１）実施団体　①白幡同窓会　②学校ＰＴＡ　③学校教職員　④本会の目的に賛同する者

（２）実行委員会役員　上記①～③の代表者

（３）委員会規程　名称、目的、組織、役員等

２　記念事業の概要と進捗状況

（１）記念行事　①式典　2020年10月31日（土）

②講演会　　講師　宮嶋宏幸氏（高30回卒）（株）ビックカメラ代表取締役社長

③アトラクション　　在校生によるアトラクション

（２）記念事業　体育館大型電動スクリーンの設置

（３）記念品　トートバッグ、キーホルダー、クリアファイル等

（４）記念誌　110周年記念誌に準じて発行

（５）事業費　記念事業残金、同窓会補助金、ＰＴＡ補助金等

平成 31 年度　同窓会総会のご案内

平成 31 年度の白幡同窓会総会は 4 月 6 日（土）12 時 30 分から竜一高体育館にて開催する予定です。今回ご案内の往復葉書を差し上げるのは、各卒業回の幹事の方々と、招待学年の高校 12 回・22 回・37 回・52 回・62 回及び定時制 8 回・18 回・33 回・48 回・58 回の卒業生全員です。お誘い合わせの上、多数の同窓生の参加をお待ちしています。

なお、招待学年の出席者の方には、陶芸家・植竹敏氏（高 27 回）作製のオリジナル校章入りの「白萩釉鎬湯呑」を記念品として贈呈いたします。

経費の関係で同窓生全員に往復葉書でのご案内はできませんので、この「白幡」のお届けが招待状に代わるものです。毎年約 16,000 部の会報を同窓生に送付しています。招待学年以外の同窓生の参加を心からお待ちしています。参加いただける方は事務局（表紙に記載：メール又は電話）までご連絡ください。

総会終了後には、例年通り懇親会を開催します。場所はアルシェ（龍ケ崎市松ヶ丘）を予定しています。学校から距離があるため、マイクロバスを用意する予定です。なお、懇親会は午後３時から５時までの予定です。詳細については、同窓会ＨＰをご覧ください。同窓生の皆様と若き青春時代の思い出をお楽しみください。

同窓会便り

高校第七回

大久保泰夫

千秋の雪積もりたる・・・我が竜一高校歌のもと八十二歳の同窓会を割烹松泉閣で四十名出席して開催しました。椎名馨さんの挨拶に続き三瓶和昭さんによる講話は歳にふさわしく遺言書・相続の話で皆熱心に聞いていました。私達の同窓会は講話付きで五十歳頃からはドクターが四人もいたので交替で健康講話をして頂きました。還暦同窓会の時は宴席とは別室で武藤博士のガンについての話で先生方も私達の方の席へ座って頂き一緒に受講して頂きました。懇談の時間になり校歌の作詞者の寺田彰司先生のお孫さんの兼松（寺田）友子さんが歌ったのは「命短し恋せよ乙女」でした。成程これからの人生こういう気持ちで過ごしますか。当日会場へ向かう佐貫駅で高谷精二さんがあまり歩けない鈴木幸子さん（牧野先生の令嬢）に出会い付きっきりで面倒を看ていました。彼は高三の時教室の前方に座っていて後ろの方でガヤガヤしていると振り向いて、その辺うるさいぞ、と一喝。これで静かになり生徒も先生も良かったと思いました。頼もしい男です。二年毎に続いた同窓会も今回が最終回でこれからは近隣の人や親しい人で食事会コーヒー会等になるでしょう。恒例のお開きの校歌の音頭取りは百周年の時頂いたCDの演奏でいつも会計を担当してくれた石橋信雄さんに、最後はこの同窓会の発起人の一人である山倉康道さんに三本締めで締めて頂き我等の同窓会は終了しましたが今迄培ってきた友情は絶えることなく又校歌千秋の雪積もりたる・・・も永遠に。

高校第八回

齋藤　佳郎

八回卒は近年一年おきに開催している。今回は十月二十八日（日）、牛久沼を望む「山水閣」において開催した。

龍ケ崎市内、江戸崎、取手、牛久から集まる十五名の幹事会を開き、スムーズに幹事代表を決め、幹事会は極めて快く進行する。

八十歳を超えては、参加者数は三十名から三十五名程度と予想したが、嬉しいかな、四十二名もの出席者。それに、三年間、授業では数学担当、部活動では剣道部及び籠球部顧問をされた齋藤邦彦先生がご出席くださったことが何よりの喜び。先生は、今年九十二歳。先生のご挨拶に一同深く感銘。ご挨拶の要旨を記しておきたい。

「本当に一人一人が社会のために尽くされたことを思うと、私は恵まれた男だなあと思う。本当に、八回程優秀な連中はいないと思う。（笑い）いや、お世辞ではなく本当に。

先生というのはこんなにも巡り合わせという、人生にただ一回しかない出来事で、いつまでも大切にされて本当に有難いことです。―中略―皆さんもお体を十分大事にされて、私よりもずうっと長い間生きてくださいと心からお願いして挨拶といたします」

八十を超えた歳になっても、先生から褒められ、励まされることは心地よく、出席者一同ホッコリ気分に浸る。

先生のもとには、女性も男性も一人、二人、三人と歩み寄り実に楽しそうな会話、同窓会ならではの光景。同窓生同士も席を移動しては和気藹々と語り合い、卒業後、初めて会えた友との歓談などが進むうち、校歌斉唱の時間。「白幡台で学べてよかった」という表情にあふれて歌う姿に、それぞれの若き日がオーバーラップして見え、心地よい余韻を残し、二時間半の会がお開きとなった。

高校第九回

菊地　耕基

五月十三日第九回卒業生の同窓会を牛久市の中華料理店「甲子亭」で開催。

昭和三十二年以来六十二年を過ぎ、マドンナ達も相応の年を重ね、紅顔血気盛んな少年達も白髪の似合う姿になった。

今年は傘寿の年、今日はそのお祝い会にもなった。振り返ってみると約二百三十名程だった同級生も既に七十名を失い、十五名の住所未確認者を勘案すると名簿上は総員百四十数名程に。本会の出席者は四十四名内女性五名。今更ながら光陰矢の如く、そして戦後の食糧難にもめげずに生き抜いて来られた事に改めて感謝した。

今回の同窓会のテーマは「六十二年前の想い出」としてスタート。当時を少し振り返ってみよう。戦後九年、日本での生活に見切りをつけ家族で新天地を求め、南米へ多くの人々が渡っていった時代に高校へ。中学校から高校へ

の進学率は約五〇％、進学難、就職難の真っ只中。竜一高では校長はじめ、先生方は我々の学業アップに又卒業後の事を考慮、いろいろ策を練り、運動部の活躍にも真剣に取り組んでくださいました。この年運動部成績が県総合一位という誇らしい実績を収めた事を思い出す。

定時に開会。幹事紹介、物故者への哀悼の黙祷、挨拶の後、桜井一美君の音頭で乾杯。野球の想い出話と竜一高のRの入った硬式ボールを披露、懐かしさを改めて確認した。暫し談笑の後、当時の想い出として、県総合一位と活躍した各運動部を代表し、全国大会個人第三位と輝かしい実績を持つ卓球部の樋口存君が「とにかく暑くて、とにかく寒い練習場で毎日飽きもせず練習に励んだ」と笑えない事実を披露。次に小守（旧大野）和江さんの想い出は、意外にも勉強の話題でなく、同級生との登山と交流、失敗談に終始し、会を盛り上げてくれた。又飛び入りで、高橋昭君が健康に関する経験談を語るなど全く自由な雰囲気で会はなごやかに進行。

出席者全員、良くしゃべり、よく飲み、たらふく食べて、時間を忘れ楽しんだ。

その後の二次会でも多くの人の参加で、盛り上がり、次回の再会を期し別れを惜しんだ。又香取昇君が自作のお米十袋をわざわざ持参して、「参加者に配ってもらいたい」との嬉しい贈り物があり、どう配分するか幹事泣かせのハプニングも。

今後の開催についてのアンケートの結果二年毎が圧倒的に多く、その方向で継続することに決定。

今回の記念写真は集合写真を大きくし、別に各テーブル毎のスナップ写真と共に、五枚刷りのアルバムを幹事の中島俊彦君が編集、会計報告と合わせ、住所未確認者と出欠未着者のリストを出席者全員に送り、消息確認の協力を要請した。幹事の皆さん大変お疲れ様でした。

高校第二十六回

赤石　守

「久しぶり」「あなたは誰？」「俺だよ、俺」

そのような言葉が飛び交う中、我々竜ヶ崎第一高等学校第26回卒業生同窓会は、平成30年9月16日に「牛久シャトー」を会場に開催されました。

第26回卒業生同窓会は、平成27年に開催しましたので、今回は3年ぶりの開催となりました。白幡台の学び舎を昭和49年3月に18歳で卒業した我々も、45年が過ぎ、もうすでに60歳を超えました。今でも信じられないことですが、体力も落ち、髪の毛も白くなったり少なくなったりしましたが、みんなから「早く同窓会を開いてほしい」との声が高まり、今年第26回卒業生同窓会を開催する運びとなった次第です。

今回の同窓会には、齋藤佳郎先生、横須賀英明先生、市毛正道先生、藤沢宏至先生、中根宏先生の5名の恩師の出席を得て、また、第26回卒業生は70名の参加があり、合計75名で盛大に開催されました。

集合写真の撮影の後、これまでに逝去された友を偲び黙祷をささげた後、発起人代表関口広行氏の挨拶、そして川村光男氏による乾杯で、宴会が始まりました。その後出席された恩師の先生方からご挨拶をいただきました。特に毎回ご出席をいただいております藤沢先生は91歳になられるそうですが、まだまだお元気のようでした。

出されている料理を食べることも忘れ、そこかしこで歓談の輪ができています。時間が過ぎていき、3年生当時のクラスごとに全員を紹介し、また部活動ごとにメンバーを紹介する頃は、気持ちは18歳にかえり、ある意味トランス状態となって盛り上がっていきました。

近所に住んでいて日頃から頻繁に会う仲間同士もいるし、高校卒業以来初めて顔を合わせた同窓生もいたり、最初は顔を見ても誰かわからなかったりしましたが、時間が経つにつれて顔と名前が一致すると、高校の時の体育祭や文化祭の思い出だったり、部活動の思い出だったり、やんちゃをしたクラスの思い出だったり、高校生当時の話に花が咲いています。更には、現在の仕事のことだったり、お酒が入っていることもあり、どんなに話しても話し足りません。会場のいたるところで旧交を温める姿が見られました。

夜になってきてもまったく終了する気配もありませんでしたが、最後に元竜ヶ崎第一高等学校応援団桜井清治氏の音頭によりエールと竜ヶ崎第一高等学校校歌を声高らかに歌い、閉会となりました。

もちろん大半の出席者は名残尽きなく、三々五々二次会の会場を求め、60歳を過ぎた年齢には思えない元気さで夜の街に繰り出して行きました。

最後に今回初めて出席した仲間からお礼のメールをいただきましたので、その一部をご紹介させていただき、今回の第26回卒業生同窓会の報告とさせていただきます。

『久しぶりに再会する友との会話はとても楽しく、ほど良い自慢話や話のクドささえ、心地良く思えました。たぶん自分の話も、年とともにクドさを増し自慢話も多いのだと思います。

友の成功は、自分のことのように誇らしく思え、まだまだ自分もがんばろう！と、良い刺激にもなりました。とは言え、皆、それぞれに大きな苦労や悩みも乗り越えて来ら

れ、今に至っているのだと思います。

今回、同窓会に参加できた互いの幸せを、心から喜び合いたいと思いました。』

今回の第26回卒業生同窓会は5回目の開催でしたが、いろいろな方の協力があって、盛大に開催することができました。出席いただきました先生方、そして第26回卒業生の皆様に改めて感謝申し上げます。

高校第二十八回

加藤　勉

今年三月二十五日、八年ぶりとなる第二十八回卒業生による同窓会を、「クレストホテル柏」（千葉県柏市）にて約六十数名の参加を得て開催しました。

当日は、南畝先生と富永先生のお二人の恩師にもご出席いただくことが出来、また六十歳という節目での開催であったことから、参加者一人ひとりが近況報告と今後の生き方（暮らし方）を報告し合ったところです。この近況報告等では、会社の定年退職が既に六十五歳であることからこれまでのサラリーマン生活と変わらない者、日本での教師としての経験を活かして欧州のドイツに渡り日本人学校で教師を継続する者、公務員時代のスキルを活かして民間の建築確認審査機関に再就職する者、これまでと同様に今後も医師として地域医療に携わる者など、多くの仲間が六十歳を過ぎても生き方は違えど何らかの形で社会と関りを持って過ごしていくようです。

また、当日に富永先生が私たちの卒業アルバムを持参してくださったことから、参加者の多くが十八歳の自分の写真を見つめ、お互いに「やっぱり変わったなあ」、「髪の毛以外は面影はあるよな」などと笑いながら、久しぶりの交流を深めました。

さらには、お二人の先生方から私たち第二十八回卒業生の当時の様子を、事細かに話していただけたことから、参加者一同が驚きとともに、そこまで覚えてくださっている両先生に深く感謝、感激したところです。

次回の同窓会は、東京オリンピックが開かれる２０２０年に開催することを参加者一同で確認し散会しました。

（最後に、この八年間の間に、3名の大切な仲間が亡くなったことに哀悼の意を表したいと思います。）

高校第三十回

羽成邦男氏の校長就任を祝う会

細谷（桝田）美穂

「やったあ。おめでとう！」

三月末、茨城県教職員人事異動の新聞記事を見て、私は、思わず拍手をしてしまいました。『竜ケ崎第一高等学校・羽成邦男校長先生』の誕生です。

私はその日から、就任のお祝い会開催のお誘いを、今か今かと待ち続け・・・六月十五日、矢口亭にて、晴れて開催の運びとなりました。平日の夕方からの開催でしたが、地元、近隣は許より、遠方からも駆けつけてくれた同級生は総勢二十人。

会の冒頭、発起人代表元ＰＴＡ会長赤塚誠氏の挨拶から、卒業生の校長就任は、白幡同窓会としても長らく待ち望んでいたということを知り、私たち同級生としては、より一層喜ばしく、また誇らしくもありました。

というわけで、周囲の期待を一身に背負うことになった羽成先生ですが、就任二ヶ月半で、貫禄十分、すっかり校長先生の顔になっておられました。

挨拶の中で、現役竜一高生について、こんな話をしてくれました。時には、校長先生自ら教壇に立ち、授業をすることもあるそうです。生徒たちは、どの子も真面目で素直で、教師を見つめる眼差しがきらきら輝いていると。そんな子どもたちの希望をかなえてあげたい、未来を切り開いてあげたいという気持ちになると。

この話を聞いた時、羽成先生なら大丈夫、任せられると強く感じました。実は、

この生徒たちの中に、小学校での私の教え子もいるのです。

校長先生としての周囲の期待が大きい分、感じる負担も大きいと思いますが、同級生一同、応援していることをお忘れなきよう、また、お役に立てることがありましたらいつでもお声をかけてくださいませ。

最後に、「開かれた学校」を掲げる羽成校長先生は、幅広く多くの声を聴きたいと話していました。同級生、同窓生の皆さん、気軽に、校長室のドアを叩いてみてはいかがでしょうか。

高校第三十六回

海田磨起代

平成三十年四月十四日に開催された白幡同窓会に三十六回生が招待され、総会に二十五名、懇親会に三十四名が出席しました。

卒業後三十五年が過ぎ、胸に付けた名札と顔を見比べながら、「○○さん変わっていないね」、「本当に○○君？」といった声があちこちで聞こえてきました。一瞬にして気持ちは三十五年前にタイムスリップし、懇親会では出席した皆と話が尽きず、あっとい

う間に時間が過ぎてしまいました。

懇親会の後、アイガーデン下平の1階和室に三十六回生が集まり二次会を行いました。二次会からの参加者も加わり、六十名が集まりました。卒業アルバムを持参しての出席者もいて、アルバムを見ながら高校時代の思い出話をしたり、お互いの近況を報告しあったり、更に会話が弾みました。

二次会では収まらず、三次会へと場所を変え、懇親会は大いに盛り上がりました。それぞれ道がちがっても、竜一高三年間の思い出が皆の心に大切に刻まれていると感じた一日でした。

最後に、同窓会開催にご協力いただきました皆様ありがとうございました。

母校の想い出

芸は身を助く

平沢大吉郎（高12回）

昭和二十八年竜小六年二組、担任が海老原龍生先生だった。若冠二十二歳の文字通りの青年教師であった。

先生は竜一高時代、テニスに明け暮れ、その盛り上がった筋肉隆々の右腕の瘤をクラスの中で自慢げによく見せたものだった。そして、中学に進んだら是非テニスをやってみたらと勧めたものだった。

私は勧められた通り、中学・高校とテニス部に入り、海老原先生ほど上手にはなれなかったが、六年間そこそこテニス部をやり通した。後年、海老原先生と同様に教職の道を目指し、紆余曲折があったが、昭和五十四年、取手第二中学校に異動し、念願の男子テニス部の顧問に就けることになった。

当時の教頭先生にお願いして、コンクリート舗装のテニスコートに作り替えて頂き、一年中テニスができるようにした。男女一面ずつしかないけれど、コートの手入れを全く心配することなく生徒たちの進歩も早かった。隣りの取手一中も強かったので、練習試合なども頻繁に行ったりして、市内はおろか県南、県大会でも好敵手となる程、生徒たちの技量も上達し、両校で関東大会や全中大会まで駒を進めるようになった。

全中大会に出場できるチーム数は全国で32チームと、まことに狭き門で、今でも自慢できる結果なのである。

選手としては、大きな大会など出場したことがなかった私だが生徒への指導の技量は自慢しても叱られないだろう。

中学高校に奉職すると、何がしかの部活の顧問を仰せつかるのが当然なのだが、中には勉学ばかりで、中学高校時代部活動に参加したことがなかった先生は、部活動を担当することに引け目を感じるのは止むを得ないのではあるが、最近の部活動に対する若手教員の考え方にいささか消極的というか、長時間労働の元凶であるが如く考える人もいる。

私は竜一高時代熱中したテニスが、中学教師を続ける中での、大きな存在であったことにとても感謝している。

喜寿になって想う

高12回
倉沢　修市

卒業して60年。喜寿になり、自動車免許の更新を心配しているこの頃です。

心に残る思い出は、正月15日（旧成人の日）に行われていた20㎞マラソン。きつかったが完走したときの清々しさは何とも言えないものがありました。それと昼休み運動場でのフォークダンス、ドキドキしながら女性と手を合わせた青春の良き思い出。ある友は「憧れの先輩女性の手を握り、微かな香りに酔った。たった一度だけのシーンは忘却を免れている」と。（当時は一学年２５０名うち女性は20名位）

ところで皆さん、ロータリークラブ：RCという団体をご存知ですか？

国際ロータリーの理念は、「相手を思いやり、他の人に尽くす」という事です。今日の最大目標は、ポリオの撲滅です。

他の主な事業として、外国の大学へ行く人にロータリー財団グローバル補助金を出しています。今年度は35名です。日本の大学へきている留学生には日本独自の「米山奨学金」を出しています。今年度は７８５名、そのうち茨城では30名世話しています。

竜ケ崎ＲＣの最近の主な事業は、ロータリー財団の資金で、カンボジアに井戸を掘ったり、フィリピンへ移動式のレントゲン車を贈呈、また地域の事業に対してもロータリーカップと称して、小学生のサッカー大会・ミニバスケット大会を行っています。

私は２０１５～１６年度茨城のガバナーを務めました。会員は約２０００名です。ガバナーになるには日本で一泊二日を２回、国際協議会（米国サンディエゴ）で一週間、いずれも夫婦で研修を受けます。世界５３４地区から１４１８人が参加しました。

ガバナーとして地区内58ＲＣを公式訪問しました。その中で「私、竜ケ崎一高の第：回卒業生です」と話しかけられた時は、すごく力づけられた思いがしまして、流暢な茨城弁でスピーチをしたことを覚えています。

ガバナーの重責を果たすことができましたのも素晴らし

い仲間のご支援と感謝しております。

私の高校時代

高12回
海老原利子

竜一高を卒業したのは一九六〇（昭和35）年の三月です。それから五十八年経ち、高校時代はずいぶん昔のことになりました。

入学は一九五七（昭32）年でしたが、その前年（一九五六年）の経済白書に「もはや戦後ではない」という宣言が出たそうです。世の中、経済拡大が進み豊かになって行った時代のようでした。私は藤代（現取手市）の在の出身ですが、藤代に一軒あった本屋さんにも文庫本、学習参考書、問題集などがぎっしり並び、学校の帰り道、時々寄りました。その店で毎年履修科目の参考書を買って、予習に使いました。

現代は中学も高校も大抵の人が部活動に参加するようになり、学習と部活の両立についてよく話題になります。私たちの高校時代は、部活動に参加しない人の方が多かったのではないでしょうか。志ある人の自由参加といった感じでした。当時どんな部があったか思い出してみましたら、十指に余る部を数えることができました。部は沢山あったわけですが、私も身近な友も、そちらのことを気に掛けることもなく、のんびり過ごしていました。

一九四八（昭23）年新制高校が発足して男女共学となりましたが、私たちの頃はまだ女子は少なく、12回生は二十一名入学、二十名卒業でした。学年五クラス、女子はD組とE組の二クラスに半数ずつ分かれ、毎年組替えがあったので、三年間のあいだには殆どの人と同クラスになりました。クラスは違っても隣同士。休み時間は入り交じって廊下でお喋りをしました。放課後、竜中出身の人のリードで愛宕山に行った日のこと、一高の裏から小さな谷道を通って竜中の庭（今は流経大）に入った時のことなど、遥かな昔の場面が映画のワンシーンのように蘇ります。女性同士親密な交流ができたお蔭で、五年に一度行われた同窓会での再会は楽しみでした。二〇一一（平23）年に同窓会は幕を閉じましたが、その後も交流は細く長く続いています。

この度、白幡同窓会事務局様より原稿のご依頼をいただきましたが、私はたいへん悩みました。生来地味で平凡な生き方しかできない私には、昔も今も、語るべきドラマも誇れる活動歴もありません。参考にとお送りいただきました会報29号を拝見しますと、すばらしい内容、力強い文章ばかりで、皆様、伝統校の卒業生として輝いていらっしゃいました。気後れしてお断りすることも考えましたが、それも失礼なことと思い直し、駄文提出ということに致しました。お許しください。

進学希望ということで竜一に入学、伝統校の落ち着いた雰囲気の中で、先生方の熱心で行き届いたご指導を受け、一浪の後、志望校に入りました。卒業後は教員になり、自分に合った人生を歩むことができたと思っております。母校の益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

白幡台の雪月花

玉造　修（高22回）

青春の一ページ
誰にとっても大切な時だ
そして友との語らい
ときに傷つけてしまっただろうか
悩みはあった　けど
明日があった　今も

物理階段教室　上下する黒板とチョーク
夕方暗くなっての上弦の月
重力加速度の実験値が
理論値と合わない　でも見て下さった先生

それがよかったのだ
失敗が人間を成長させる
豊かになれる

時間かけて
立直る

木造の図書館で借りた本
マルタン・デュ・ガール作
　フランスの人
チボー家の人々にたくさんの先輩の汗
ジャックとダニエルの友情
　丸木舟が

果して
自分の人生はあるのだろうか　青春の時

卒業してもう五十年近く
準高齢者だ
恩師の先生方への感謝
そして
同窓の面々の頼もしい姿
出会えて幸福でした
テニスコートの誓いのごとく

甲子園の土に積もった雪
ヘアピン坂の桜
ありがとう
白幡台の雪月花

竜一高との「3+9」年の縁（えにし）

高22回
中嶋　正市

父が残してくれた畑に植えた50本のブルーベリーがたわわに実った。丹精込めた分、大粒で芳醇な味になり、今年も高校時代からの友人たちを夫婦で招いた。収穫しながら、いつか、高校時代の話に懐かしさが戻る。

52年前、私はギア付きの真新しい自転車で、片道10キロの未舗装の道を汗だくで駆り続けた。猛暑、厳寒、台風などを克服して卒業時に皆勤賞を取れたのは、その後の人生への自信や拠り所となった。

本分であるので猛烈な勉学に強烈な思い出はないが、野

次を飛ばしながら必死に応援した野球部が、あと一歩で甲子園出場を逃したときの悔しさや、京都への修学旅行では、消灯後、同じ部屋の数名で誰かの持ってきたアルコールを味見してヒソヒソと話したのも半世紀前の朧げな記憶である。その旅行先の薬師寺では若き高田好胤導師の生き方の講話に感動したり、生徒会役員の頑張りで念願の男子生徒の長髪を認めさせたことも懐かしい。10キロのマラソン大会は、加減を知らない自分にはひどく苦しかったが、根性がついた。級友と将棋に熱中したことも青春の一コマだ。

先生方はユニークだった。物理担当で芸術的な板書を階段教室で展開していた石神先生、古典の授業になぜか竹刀持参の剣道部顧問のS先生、三度踏みつけられた蛙のようなだみ声で夏の課外でも世話になった英語のO先生、紅一点で新採を悟られまいと背伸びが可愛かったS先生など、ほんの一例である。

その後、理科（生物）担当の高校教員となり、1994年から9年間も母校で教鞭を執らせていただいた。主な想い出は、大学から始めた囲碁を将棋と共にやれる棋道部にして、囲碁将棋共に県代表に導けたこと。渉外部長として自校のPTAの他に龍ケ崎市PTA連合会、県南高等学校PTA連合会の事務局校の役も果たしたこと。2000年の百周年記念事業や記念誌に四年前からその任にあたり、又その間、一年上のY氏や同学年のO氏がPTA会長で共に仕事に当たれたのも良かった。定時制勤務や新校舎への移転などの中、幸いに息子と娘が母校に学び、好きな道を見つけて巣立てたことに、母校への感謝を深くしている。

今も、同級生、職場の同僚、棋道部や教え子との交流があり、母校での12年間は我が人生にとり得がたいものになった。最後に、母校同窓生の益々のご活躍を祈念して筆をおかせていただく。

木造校舎の時代

高22回
小島　久雄
（旧姓　金子）

昭和45年3月に卒業した50年前の高校3年生。3年間を木造校舎で過ごした最後の卒業生となる。

市内まで響くサイレン音が始業の合図だが、在校中は地の利のおかげで大雪の日も遅刻することなく登校できた。自宅からは徒歩10分ほどで六十余段の上に着く。校門を過ぎ、職員室などが入る1棟目の2階建て校舎を左に回り込んだ2棟目、3棟目の平屋で3年間を過ごした。どうせ取り壊されるのだからと記念の落書きも残してきた。4棟目には理科の階段教室と、その奥にはギリシャ様式の講堂がつながっていた。秋から冬の朝夕には、坂道の土手上にあった体育館から富士の高嶺を望むことができた。

塾もエアコンもなかった時代である。冬は着ダルマで床板の隙間からの寒風に耐える。クラス55名のすし詰めが理由だったかどうか、教室に暖房器具を置く場所がなかったのは事実だ。夏休み中は自主登校し、やぶ蚊退治の蚊取線香を焚きながら、木陰に持ち出した机で受験準備を進めた。気分転換に図書館前の「日本海」での釣りも試みたが、釣果がなかったのは餌がご飯粒だったからか。

関西への修学旅行。毎夜の寝床談義は、誰かのラジオから深夜放送でヒットし始めた夜明けのスキャットが流れるころにお開きとした。よって昼は眠く、見学先の記憶は薄く、例えば行ったはずの京都国際会議場は池の鯉しか覚えていない。後年、そこでゴジャッペ英語の論文発表と討論を行うことになろうとは全く思いもしなかった。

卒業後、龍ケ崎を離れ、大学で材料の基礎を学び、東海村の国の機関で原子力開発に従事した。大学の非常勤講師も兼職した。定年退職の年は福島第1原発事故からの復興支援に明け暮れた。

最近の白幡台の変化は◎Google の航空写真などで知ることができるが、「日本海」が良く見えない。この稿をきっかけに「竜一」に足を運んでみることにしよう。半世紀前に記した思い出が新たな記憶となってよみがえることを期待して。

女子ハンド部があった頃

岡田　洋美（高37回）

合格発表の翌日、中学の先輩に誘われ、次の日から女子ハンドボール部の練習に参加した。私の「ハンドボール・ファースト」な高校生活が入学前に始まった。そもそも竜一を選んだのは、家から近く部活に打ち込めると思ったから。

私達は女子ハンド創部から五年目にあたる。桑島先生のもと普段は短時間でも集中して練習し、太田二高に数校が集まる春と夏の合宿は、がっつりナイター練習まで行った。筋肉痛に顔をゆがめ、合宿所からグラウンドへの階段は後ろ向きで降りた。キャプテン就任後は、先生と部員の間で中間管理職的役回り。貴重な経験だった。大会前夜は夢でも試合をした。そして最後には、女子ハンド部初の関東大会への出場を果たした。熱心な先生とやさしい先輩方に頼もしい後輩達、気心知れた楽しい仲間とともに、きつい練習や緊迫する試合を一緒に乗り越え、掴んだ自信と強い絆。ああ、竜一を選んで本当に良かった。

と思ったのもつかの間、部活を引退すると厳しい現実が待っていた。思えば一年生の時も勉強するよう厳重注意を受けたが、二年では試験の後すぐ古山先生に呼び出された。先生は大きな定規を片手に、烈火のごとく凄まじい迫力でとことん諭された。さすがに以後試験前は勉強した。

見た目怖いが、お茶目で人情家の古山先生。恩返しをしたかった。

半ば絶望的な気持ちで迎えた共通一次試験の後、浪人覚悟で受験校を選ぶと、二次試験まで一ヶ月猛ダッシュ。食事・トイレ・お風呂以外起きてる間は勉強したが、不思議と集中が途切れず疲れない。関東大会は一回戦敗退だったが、ハンドで鍛えられた身体と気持ちは、ここで実を結んだ。

私にとって竜一高は、丈夫な心と身体、そして仲間との絆を育み、自力で踏み出すのを温かくアシストしてくれた場所。あの頃生まれた自信と絆は、今も自分を支えてくれる。

竜一高のDNA

高37回
岡田　功

「りゅういちのかんとくさんから電話だよ」と母の声。忘れもしない昭和五十七年三月の竜一高合格発表の当日、硬式野球部M監督から電話を受けた。「明日から練習出ておいで。」とM監督。「十五の春」の余韻に浸る同級生を横目に、ようやく伸びた髪を五厘に戻し、翌日には白幡台の土埃が舞うグラウンドに立っていた。が、常軌を逸脱（？）した厳しい練習とこれに耐える先輩部員の「ど根性」を目の当たりにして速攻で自信喪失。早々とリタイア宣言となり、失意の中での高校生活のスタートとなった。それから長い歳月を重ねた今でも、「母校の思い出は？」と問われれば、この時の情景が鮮やかに蘇る。

さて、「どうなることやら」と不安の中で始まった高校生活であったが、良き先生、良き先輩、良き同級生、良き後輩に恵まれ、本当に楽しく、かつ充実した日々を送ることができたと思う。学級担任は、古山卓志先生、松浦諭先生、大竹喜士郎先生。古山先生からは現実的合理主義を、松浦先生からは誠実さと向上心を、大竹先生からは寛容さと協調性を学ばせていただいた。また、主に国語（古典）の授業でご指導いただいた小嶋豊先生には、我々生徒の立場や気持ちを慮り、親身かつ真剣に向き合っていただいたことを良く覚えており、高校時代に小嶋先生の授業を受けられたことを今も本当に感謝している。

課外活動では、硬式野球部の夏の地方大会前の毎年六月に結成される「応援団」に所属させていただいた。各年僅か二か月弱の短い活動期間にもかかわらず、規律ある厳しい練習を共有する中で醸成された団員間の友情や信頼関係は、何ものにも代え難い貴重な財産になったと思う。

竜一高を卒業してはや三十余年、彼の地を遠く離れて全国各地を流浪し、白髪、老眼、五十肩、物忘れも順調に発現してきた私であるが、今も「龍」「竜」の一文字を目にした途端、「ん！」と思わず反応してしまう。「愛校心」という言葉がいまいちピンとこない私にも、やはり「竜一高のDNA」が刷り込まれているのだろう。

竜ヶ崎一高のおかげです

高52回
西元　重雄

会報誌の執筆依頼を受けてから、高校時代を思い出す機会をいただきました。しかしながら、部活動も途中で辞め、およそ勉学にも打ち込まず、およそ竜一生らしからぬ生活を送っていた私には、この場で語れるようなものは浮かんできませんでした。

あの時こうしていればと、後悔はしていませんが、反省することばかりです。そんな私が、52回生を代表して執筆していること自体、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

恥を承知で思い出の一つを挙げますと、定期考査において0点をとったことが思い返されます。理由は寝坊でした。担当していただいた先生方には大変ご迷惑をおかけしました。科目は生物でしたが、それから十数年後、その科目を教師として竜ヶ崎一高で教えることになるとは、当時は全く想像もでませんでした。

平成24年から6年間在職しましたが、学生時にご迷惑をおかけした分、多少なりとも恩返しができていれば幸いに思います。逆の立場になり、高校生の自分がどれだけ迷惑をかけていたか、思い出す度に反省をしております。

しかし、そんな私でさえも当時の先生方は温かく見守ってくれていました。特に、三年次に担任をしていただいた野口眞先生（高26回）には大変感謝しております。自分でも何がしたいのか分からなかった日々において、まっすぐに受け止めてくれた野口先生がいたおかげで竜ヶ崎一高を卒業できました。その節はありがとうございました。

現在もあの時0点だった生物を軸に仕事をしております。今の私があるのも、すべては竜ヶ崎一高のおかげです。末筆ながら母校の益々の発展をお祈り申し上げます。

やりきることの大切さ

高52回
佐藤　宏行

卒業から18年も経ちますが、高校時代の3年間の記憶は、今でも鮮明に残っております。

現在の校舎は、私たちが現役3年生の時に完成したものです。半年間ではありますが、新校舎で過ごすことができました。また、工事中のプレハブ校舎、旧校舎、と3つの学び舎で過ごすという貴重な経験をする事ができました。プレハブ校舎では、1年以上過

ごしたのですが、それに関してはあまり覚えておりません。夏のあまりの暑さ、冬の凍るような寒さのために、記憶から自動的に消えたのだと思います。

最も思い出に残っているのは部活動です。私はソフトテニス部に所属していました。素晴らしい同期、先輩、後輩に恵まれ、毎日、楽しい時間を過ごしました。また他校と対戦する大会での勝負に対する一喜一憂はエキサイティングなものでした。私は部活動を通して学び、心に誓い、今でも守り抜いている二つの事があります。一つは「怒らない」事です。3年生の時、試合に負けた事に〝かぁーーっ〟となってしまい、ラケットを地面に叩きつけ、破壊してしまいました。18000円もするラケットを、親に買い直してもらったとき、本当に自分が情けなくなりました。この時から、心を常に穏やかに「怒らない」ようにしようと誓い、社会人になった今でも貫いています。もう一つは「やりきる」です。私は2年生で団体戦のレギュラーになりました。しかし、練習熱心ではなく、顧問の先生がいないときは、サッカーや草野球などに興じておりました。一方で、同期の部長は、その時レギュラーではありませんでしたが、練習に手を抜かず、私たちが遊んでいる時も真摯に練習に励んでいました。3年生の時には、私は伸び悩みレギュラーから脱落しました。一方、部長は県大会2位となり、インターハイに出場しました。最後まで手を抜かずに「やりきる」事の大切さが身に染みて分かりました。

私の大切にしている信念は、高校生活に形成されたものです。高校生活というのは何にも代えがたい貴重な物を学べる時間・事、を提供してくれる場所でした。

部活動の思い出

竹藤　憲司（高52回）

卒後十九年が経ち、仕事に家庭にと慌ただしく過ごす中で、今回このような機会を頂き久方ぶりに高校生活を思い返すことができました。友人との何気ない日々、様々な学校行事や大学受験と思い出は多々ありますが、やはり柔道部で過ごした日々が最も鮮明に記憶に残っております。

私が所属していた柔道部は、監督羽成邦男先生の指導の下、非常に厳しい練習で知られ、当初はついていくこともままなりませんでした。とはいえ、先生の教えは、柔道が強いばかりでなく、勉強も疎かにしてはいけないし、人間性も養わなければならない・・・文武両道の校風に憧れ入学したものの、これはなかなか大変で、毎日四苦八苦しておりました（笑）。先生のご指導は厳しくもありましたが、同時に多くの温かい言葉もかけて下さいました。

最も印象的な言葉は、「必死に向かってくる相手に勝つことは楽ではない、逆に力の差がある相手と闘っても必死になれば簡単には負けない、耐え忍んでいれば必ず一度はチャンスが訪れる、それでも勝てない場合は引き分ければよい、負けなければ次がある、これは今後の人生でも同じなんだ。人生は常に勝負の連続だが負けない様に生きていかなければならない、それは柔道よりよほど厳しい、その時生き抜く力を三年間の高校生活で養ってやりたい」このような内容であったように思います。

なんだか、先生の格言集のようになってしまいましたが、これも私にとっては大切な思い出ですのでどうかご容赦ください。とにもかくにも、羽成先生の熱いご指導を頂きながら、それでも挫けそうな時には矢須先生に支えて頂きながら、我々は日々の稽古に励みました。もともと実績のある選手も少なく、身体的に恵まれた選手もいないチームでしたが、諦めずに努力を続け、共に支え合いながら切磋琢磨しました。その結果、関東大会団体戦では二十六年ぶりに決勝トーナメントに進むことが出来ました。

しかしながら、私たちにとって最も大きな財産は、皆で一つの目標に向かって汗を流したその日々であったように思います。今でも当時の仲間とは度々集まり、その度お決まりの昔話で盛り上がる、そんな関係が続いております。今後もこのかけがえのない絆を大切に、支え合っていきたいと考えております。

最後に、多くの学びを与えて下さいました竜ヶ崎一高の益々のご発展と、同窓生の皆様の益々のご活躍を祈念し、結びとさせて頂きます。

私の原点

高62回
川村　みなみ
（旧姓　金澤）

中学生時代、竜ヶ崎一高の下からあの階段と坂を見たとき、上にはきっと神社があるんだろうと思っていました。高校受験の勉強を進めていく中で、竜ヶ崎一高の存在を知り、家から最も近い高校であること、建て直した新校舎が綺麗だったことに惹かれ、勉強に励み、進学することができました。

入学後、部活動に入るか悩んでいたとき、丁度その年に発足した応援団でのチアガールの存在を知り、チアに憧れを抱いていた私は参加する決意をしました。それがきっかけとなり、文化祭である白龍祭の実行委員にも参加し、白龍祭後には生徒会役員となり、縁あって翌年には生徒会長として信任していただきました。元男子校であり、在学中も男子生徒の割合が多い中、私なんかが生徒会長なんて・・・という思いもありましたが周囲の人に恵まれ、たくさんの方の支えがあったか

らこそ私は生徒会長として高校生活を全うする事が出来ました。

私はそれまで、人前に出ることがそれほど得意ではなく、陰で働く役割をすることが多かったのですが、生徒会長になったことにより、人前で話しをする機会も増え、人前に立つ事に自信が持てるようになりました。

生徒会活動では、一年の半分程度を白龍祭に費やしていたと思います。準備から当日の運営まで、今思い出しても本当に大変なことばかりで、うまくいかずに涙したこともありましたが、仲間に支えられ、みんなで一緒に乗り越えたことで今ではとても輝かしい良き思い出となっています。〝神様は超えられない壁は与えない〟という言葉をよく耳にしますが、それをとても実感した高校生活でした。生徒会活動だけではなく、軽音楽部でのバンド活動やチアとしての硬式野球部の応援など、私の高校生活は今振り返っても胸を張って楽しかったと言える充実したものでした。

社会人となり、幼い頃からの夢である幼稚園教諭の職に就き、高校生活での経験が私の自信と力になっていると感じます。高校生活を共にした仲間は今でも連絡を取り合う一生の友だちです。私にとっても竜ヶ崎一高は自分の原点であり誇りです。

根っこは今でも変わらず

高62回
工藤　広静

高校を卒業して8年、高校時代を思い返す。一番の思い出は何だろう。

高校時代の私は、常に何かに全力投球というよりも、楽しく当たり障りなく生きていた。勉強も、部活も、遊びも。そのためか、思い出すのは出来事というよりかは、好奇心旺盛だった当時の感情だ。

高校1年生5、6月、クラスメイトと仲良くなり始めていた頃に開催された白龍祭。私がいた1年G組はフレンドパークを模したアトラクションをつくった。当時、どんな独創的な仕掛けを作ろうか勝手にワクワクしながら試行錯誤していたのは覚えている（結局上手く実現できなかった気がするが・・・）。

高校3年生の受験シーズン、周りに流されながら勉強していた私だったが、生物だけは楽しく勉強していた。ミクロな世界を学ぶことにワクワクしていた。

卒業後、生物に対する好奇心に従って大学そして大学院を選んだ。現在は医薬品の開発職として、将来どんな面白そうなことをやってみようかと日々模索しながら働いている。

また、社会人になってから半年に1回程度、サッカー部時代に何度も走った外周4.8㎞コース（校舎裏のペットショップがある畑近く）を、当時のうろ覚えの自己ベストタイムと競いながら懐古しつつ走っている。

走っているときもそうだが、こうやって昔の自分を思い返すと、今の自分は高校時代に持っていた好奇心を色褪せさせることなく、仕事や趣味に没頭している気がする。

学生時代から変わらないものがある人は、その部分がその人の人生に少なからず影響しているのではないだろうか。久しぶりに竜一の同級生と会って話すと、皆「変わらないね」と言い合う。変わらないと感じるのは、竜一時代から各々の太い根っこの部分は変わっていないからなのか。自分は竜一で好きなことができて良かったと思っているし、これからも自分は変わらないのだろうとも思う。

想いが先走ったような文章となってしまったが、これを読んでくださっている方々にも、自身の竜一を思い出していただけたら幸いである。

母校と私の人生

母校での思い出

定7回
中台欣一郎

私は、定時制第7回卒業生（昭和三十四年三月卒）です。

今年（平成三十年）四月十四日、五十九年ぶりに母校の六十余りの石段を登りました。

白幡同窓会総会に出席するためです。

毎年発行される白幡同窓会会報で総会があることは知っていましたが、これまで一度も出席したことはありませんでした。

今回、出席したのは招待状が届いたからです。なにしろ卒業以来五十九年の歳月が流れています。同期生であってもお互い町中で会ってもわからない年齢となりました。この機会に同期の仲間と会えるのではないかとの期待もあり出席した次第です。しかし、残念ながら「定時制七回卒業生」の出席は私一人でした。

総会は、応援団とチアリーダーによる校歌と応援歌、吹奏楽部の力強い演奏のオープニングではじまりました。身がひきしまり青春に戻った思いでした。

また、会場を移した懇親会も楽しかったです。お互い日頃は見ず知らずの人達が旧知のごとく打ち解けあう「うたげ」でした。白幡同窓会の懇親会がこんなに楽しい会であることをはじめて知りました。

私が定時制七回生として入学したのは昭和三十年四月、定時制が昼間から夜間に移行した年でした。記憶がうすれ定かではありませんが、入学時のクラスは十数名はいたと思います。その後、四年の間で普通科への転入や、中途退学する者も出て卒業時は七名でした。

私が中学を卒業したのは昭和二十八年、家庭の事情もあ

り進学をあきらめ、市内に就職しました。そして、二年後、夜間に移行した定時制夜間部に入学したわけです。

今にして思えば、その頃はまだ勉学に燃えていたということだと思います。

さっそく入学願書をとりよせ入試試験を受けました。二年間のブランクに対する不安、中学校に内申書を取りに行き、先生に入試のでき具合を聞いたことを今でも覚えています。

無事入学し、仕事と学業に励んだ四年間でした。辛いと思ったことは一度もなかったような気がします。思い出すのは、職場を退社して、始業時の午後六時に間に合うように、いくど六十余の石段を自転車を担いで登ったことか、また、下校時に石段下の売店で、コッペパンを買い、食べながら自転車に乗り家に帰ったことをよく覚えています。なぜか、授業中のことはあまり覚えていませんが、幾何の宿題を、布団の中で解いている内に眠ってしまい朝だったことがよくありました。授業は楽しかったのかもしれません。

私たちを担任してくれた先生は、大学を卒業してはじめて着任した教師でした。私たちとはあまり年齢の差もなく、授業時を離れれば、対等に話してくれる先生でした。私たちの悩み事をよく聞いてくれました。みんなで下宿先に押し掛けたこともありました。

四年間で学んだことは、より多くの知識を得たことは当然ですが、それより、我慢強い忍耐力を学んだことを今でも感謝しています。

竜一のいとしき破壊者たち

高33回
田島　英一

近代初期に起こる現象の一つに、「運命」から「選択」への転換がある。例えば、江戸時代の職業は通常世襲であるし、自らが生きる社会は地縁、血縁のしがらみでできていて、自らの意志で人生を選び取ることが難しい。一方近代においては、職業も婚姻も居住地も、その選択がおおむね個人の自由意志に委ねられている。私は中学まで、同じ学区の中でぼんやりと生きていた。だから、竜ヶ崎一高を進学先に選んだ時、自分の人生がようやく「近代」に入ったのだろう。中学までは「おなじみのメンツ」だったのが、高校では初対面の人が大半を占めた。しかも、先生方といい生徒といい、なかなかにキャラが濃い。大げさに言えば、竜一入学によって、鎖国が解けた直後の島国住民のような、当惑とチャレンジを感じた。坂本龍馬風に言えば、「人生の夜明けぜよ」といったところかもしれない。

異なる個性との出会いは、それまでの「私」が壊れる契機でもある。人は、自己破壊と再構築という、いわばスクラップ＆ビルドの中で成長する。そして、竜一の先生方と生徒たちは、みな何らかの意味で、私の成長を促す教師（破壊者）であった。例えば、三年間活動したハンドボール部は、未経験者の寄せ集めで、個性むき出しのまとまりのない集団であった。しかし、監督の矢沢達司先生やチームメートたちと衝突しつつも、その後ろ姿から多くを学び、互いの立ち位置を繰り返し微調整し、最終的には県大会準決勝まで進出するほどのチームワークが生まれた。また、倫理社会の中條武樹先生や現代国語の竹内修先生は、高校生の小僧相手に人間の深淵や生の矛盾に関わる問題をポンポン放り込んでくる、無茶振りの大家であった。「学びて思わざれば則ち罔し」とは孔子の言葉であるが、それまで漠然と読み散らかしていた本が、両先生の授業では答を模索する糧になると気づかされた。すべて紹介することはできないが、竜一で出会う人すべてが、このように、既存の「私」を壊してくれる、いとしき破壊者であった。

竜一という個性の大海に自らを放り込んだことで、腹もすわった。その後も、慶應義塾大学進学、同大学院進学、東京外国語大学での短期武者修行、中国復旦大学への国費留学と、多様性の天国とも伏魔殿ともつかないところに、飛び込み続け、それが、昨日とは違う「私」を少しずつ育んでくれた。現在の勤務先は慶應義塾大学総合政策学部という、これまた慶應一の学際カオスであり、そこで教授職を拝命している。専門は中国地域研究、特にこの十数年は、キリスト教系の団体を研究している。留学中お世話になった復旦大学生が、気がつけば妻になった。家族の間では、日本語と中国語がチャンポンで飛び交う。今では自分が無茶振りマニアで、学生に底意地の悪い質問をするので、すっかり恐れられている。講義科目では、定期試験をしない。授業なんて、その場で考えてなんぼである。

たまに、オジサンになった元ハンドボール部員たちと同窓会をやる。そうして、「こいつ、こんなに大きな男だっけ」と、感心する。いとおしき破壊者たちは、私などより余程上手に、「自分」を壊し続けたらしい。

（慶應義塾大学総合政策学部教授）

「マルチタスク」

高48回
眞鍋　芳明

執筆依頼を頂いた際、最初に頭に浮かんだタイトルが「マルチタスク」である。マルチタスクとは複数の作業を同時もしくは短時間に並行して切り替えながら実行することを意味する。元来コンピュータ関係の用語であるが、コンピュータ制御が高度になりそれが当然の機能となった結果、現在ではヒュー

マンタスクのひとつとして使用されるようになった概念である。

大人の階段を上る高校時代には、勉強や部活はもちろん、恋愛に友人関係から委員会などに至るまで、あらゆるタイミングでマルチタスクが求められる。文武両道を掲げる竜一ではなおさらのことだ。有り余るエネルギーを内包している高校生が全力で青春を謳歌するためには、マルチタスク能力を向上させることは基礎学力を向上させることと同じくらい、いや時にはそれを凌駕するくらい重要なことである。例に漏れず私も練習をサボって・・・もとい、練習効率を上げて遊ぶ時間を確保したり、デートの最中に宿題を教えてもらったり、文化祭の準備期間を利用して新たなコミュニティとともに新しいゲームに取り組んだりと、マルチタスク能力の錬磨には余念がなかった。って遊んでばかりやんか！　スイマセン。真面目に書きます。

現在、私は大学教員として大人の階段を上った（ハズ）の学生を対象に指導、教育を行っている。あわせて陸上競技部の監督も務め、２００名を超える部員とともに２０２０年の東京オリンピックを目指している。そうしたなかでよく耳にするのが「教員採用試験に集中したいので休部させてください」「ゼミ合宿の発表準備があるので練習を休ませてください」といった類の相談である。この相談を受けるたびに「なぜ君はもっと欲張らないのか。今こそ文武両道を実践するときだろう？」と問い直している。

私は青春を謳歌しつつ大学の代表選手としてインカレで戦い、アスレティックトレーナーの資格を取得して日本代表のトレーナーになり、ついでに博士号を取得して、現在は最高学府で仕事をしている。なぜ諸君はレールを一本に絞るのか。なぜジェネラリストを目指さないのか。もちろん、人間の集中力は１００％を超えることは無いのだから勉強なら勉強、部活なら部活に全てを捧げたほうが成果は上がるという考えもある。それを推奨するような、マルチタスクに関するネガティブな研究報告も散見される。しかし、こと人生において、実生活においてはどうだろうか。真っ当な人生（？）を送っているならば何か一つだけの事案に邁進することなど許されないだろうし、たいていの仕事はマルチタスクが前提として進められる。ならば多くの大人が助けてくれる高校時代にこそ、マルチタスク能力を磨くべきである。

文にも武にも名をはせる竜一には、その素養が整っている。高校時代に何を学んだかと聞かれたら私は即座に答える。「部活して勉強しながら遊ぶ方法を学んだのだ」と。我が後輩達よ。大いに勉強し、大いに遊び、大いに汗をかこう！

（国際武道大学准教授）

座右の銘は「一生感動 一生青春」

高56回
綾部　みよ

竜一を卒業してから、はやいもので、14年が過ぎてしまった、ある日、大好きな私の母校の会報の依頼が舞い込んできました。依頼文と一緒に送付されてきた白幡を読み諸先輩の文章が素晴らしすぎて、果たして私なんかで大丈夫かと焦っています。さらに、「母校と私の人生」なんて・・・と、頭を抱えてしまいましたが、覚悟をきめて机に向き合う締切日の夜。そういえば、学生時代の白幡の生徒会の原稿も生徒会長が締切日にやっていた記憶がフラッシュバックしました。

一学年58人という小中学校生活を経てやってきた私にとっては、その約5倍の規模の学校という新しい世界に、不安と緊張とワクワクが詰まって入学しました。真面目な中学校生活を送っていた反動でか、見事に高校デビューを飾った私。ルーズソックスに、茶髪に、ピアスに、ばっちりメイク！で生徒会活動なんて誰が想像していたでしょう。

そんな私の竜一高時代の思い出を振り返ると、今の私を形成したのがこの時代だったと確信しています。誰かと、なにかを形にすることのおもしろさだけでなく、チームワークやコミュニケーションの重要性を経験できました。誰かに、ちょっとでもよく見てもらいたくて無理にいい子して無理をするくらいなら生意気とかムカつくと思われても、きちんと思ったことが伝えられた方が、後になって後悔しない生き方。イラっとして頭に血がのぼってエキサイトすることも確かにあるけど議論しあったほうがより絆が深まる生き方です。

それを一番学ばせてくれたのが球技会の準備期間。当時の生徒会長が「みんなー、ちゃんと議論しようよ」と泣きながら生徒会室で発した言葉は、忘れません。言いたいことを、言いあったあとはチームワークにさらに磨きがかかり、学年別対抗だった球技会を全学年対抗にして大成功を収めました。

そんな大好きな先輩が卒業するときに、卒業生に一輪の花を贈りました。「一生感動 一生青春」という言葉を添えて。

大学進学したあとも、竜一の友達とはよく集まっては、学校やバイトに恋愛、進路についても相談しあいましたし、今も頻度は少なくなりましたが、当時と変わらず心地良い時間が過ごせます。そういうわけで、五年に一度みんなで集まる同窓会を開いています。みんながどんどん大人になっていくのが楽しいですし、準備期間がこれまた文化祭みたいなんですよね！きっと、竜一のみんなで集まって会社を興したらすごい会社になるだろうなぁと思っています。

この五年に一度の同窓会に

は、当時の担任の先生だけでなく、なんと校長先生も来てくれます。それが本当にうれしいです。次回も、みなさんにご案内しますからね!!

さて、だいぶ前置きが長くなったけど、そろそろ私の話を。私は、3年半つとめた通信会社を退職して、牛久市を拠点に地域の情報発信を行うNPO法人をたちあげて活動しています。きっかけは、2011年の東日本大震災。自分が生まれ育った環境について何も知らず、高校は好きだったけど、生まれ育った地域はあまり好きでもない、という私でした。ですが、ご近所さんに井戸水をもらったり、お風呂に入れさせてもらったりという、ひょんなことから、地域のみなさんに育ててもらって今の自分があることに気づいたとき、〝当たり前〟になってしまった地域への思いを〝ありがとう〟という気持ちに変換し、地域で活動していきたい！と思いました。何もないつまらない街だと知ったつもりになっていた私が、生まれ育った街の魅力を掘り起こして発信することで、私みたいに「生まれ育った街が大好き！」と地域に誇りを持っていろんな場所で生きていけたらいいな、と、民間のテレビ局がない茨城県で、市民メディアを立ち上げました。

もうすぐ6年半が過ぎますが、なかなかうまくいかないことも多いのですが、毎日楽しく今を生きているなぁと実感しています。地域に飛び出してみると、いろんな出会いがありますし、一つ一つをつなげていくとおもしろいことがおこったりします。さすがは、地元なので竜一の先輩や後輩、お世話になった先生方にお会いすることが多くて、それもうれしいです。できたら、そんなみなさんと県南地域でおもしろいことを仕掛けていけたら最高です！

最後に、大好きな竜ヶ崎第一高等学校のますますの発展を祈念して結びとさせていただきます。ありがとうございました。

私は第六十六回卒業生

定66回
中俣　義夫

私は現在75歳である。そして竜ヶ崎一高定時制第66回卒業生だ。このような出だしで書くと、50年ほど前の定時制卒業生なのだろう、と思われる方も多くいるかと思うが、実は今年（平成30年3月）卒業したばかりである。

定時制高校に通うきっかけは、私が16歳のころ職場で出会った同僚との約束である。詳細は割愛させていただくことにするが、私はその約束を守るために71歳で長年勤務した会社を退職、竜ヶ崎第一高等学校に入学することを決心した。

平成26年4月7日、私は晴れて定時制高校生となった。しかし、同級生は16歳から20歳代の若者ばかり…。そんな同級生に囲まれての学校生活が始まった。入学したての時は「授業についていけるのか?」「みんなと仲良くできるのか?」心配事は山ほどあった。

そんな私を救ってくれたのは、ほかでもない同級生達だった。同級生達は、年齢の差など感じさせず、「クラスメイト」として私に接してくれた。時には、アルバイト先での悩みを聞き、冗談を言い合い…、そんな私が救いになってくれていたなら、こんな幸せなことはない。

卒業式間近、2年間支えてくれた担任の先生と、共に切磋琢磨し対等に接してくれた同級生に、感謝の言葉と自分への励ましを込めてこの言葉を贈った。

『明日死ぬかのように生き、永遠に生きるかのように学ぶ』

この言葉は、マハトマ・ガンディーの言葉だ。ガンディーの言葉を胸に、体力・気力・挑戦力を持ち、一日一歩、少しずつ前に進み永遠に生き、学びたいと思っている。

75歳になった私は、現役の大学生だ。これからも学ぶ心を失うことなく続けたいと思っている。

こんな気持ちにさせてくれたのは、ほかでもない竜ヶ崎一高の先生方と同級生達だ。

もし会える日が来るならば、定時制高校に通うきっかけをくれた龍ケ崎出身の同僚と、竜ヶ崎一高定時制で学んだ素晴らしい四年間を語り合いたいものである。

（流通経済大学在学）

寄付金に感謝

次の方から白幡同窓会に寄付がありました。心から感謝申し上げます。

高28回一同　様

※平成29年10月1日から平成30年9月末日までの寄付です。

トピック①

佐藤有（高8回）氏の写真展 ～牛久沼　水辺の記録～

平成三十年六月に佐藤有氏の写真展が牛久市教育委員会等の後援で牛久市生涯学習センター展示室において開催されました。

一九五九年から半世紀にわたり佐藤氏が撮りためた牛久沼の自然風景とその周辺に暮らす人々の様子や沼の歴史を紹介する展覧会でした。

佐藤氏は「江戸時代から続いていた原風景そして浮田があったこと、現在は見ることはできません。写真は、今を写せるが、過去は写せません。写真の記録の重要性を知っていただく意味で公開展示しました。」と語っています。

展示された写真の中から3点を紹介します。

城中から見る浮田群

浮田

巻網漁

トピック②

白幡台の六年

高2回
鈴木　久

旧制中学と併設中学

同窓生の方から「旧制中学と併設中学の違いや4年制と6年制のシステムの違いについて、会報で紹介してもらえないか」という要望がありました。会報編集委員会で検討した結果、その時代を白幡台で過ごした同窓生の方に、その当時の様子を語ってもらうことがよいだろうということになり、高校の教職に40年従事し、その後近隣市町村史編纂や歴史講座、文化財保護などにも携われています鈴木久先生にお願いすることにしました。

終戦と新学制の関わりや龍ケ崎高等学校と竜ケ崎第一高等学校の名称の違いなど大変興味深い内容になっています。

恩師の色紙

わたしたちはオリンピックの年に同窓会総会を続け、中間には在京のものが集まりました。この間、母校創立八〇周年、昭和五十五年には母校に集合、校門プレートを寄贈しました。

毎回出席の蓮沼節哉先生は喜寿のわたしたちに色紙を配られ、そこには「白幡の丘をはなれて六十年　心に宿る青春の日々」と書かれていました。次回三年後は最後の同窓会として卒寿の蓮沼先生を囲み、校歌を斉唱して会を閉じました。あれから七年、恩師も多くの同窓生も亡くなりました。六年間同じ校舎ですごした思い出は尽きません。

価値転換の最中

わたしは昭和六年の満州事変勃発の年の生まれ、根町の新しい小学校に入り、アジア・太平洋戦争に突入、尋常小学校も国民学校と名称を変えました。十九年、龍ケ崎中学校に口頭試問、体育実技と教練の行進の試験を受けて入学しました。わたしは海軍兵学校を目指すと堅く誓った作文を書いた軍国少年でした。七月には、八原飛行場建設に動員され、十月には応召農家に十二日間の勤労奉仕、翌二十年、本土決戦に備えての利根川架橋工事に従事しました。足指をトロッコの車輪にひきつぶされわたしは近くの医院に運ばれ、母親に背負われて帰り、天皇の終戦の「玉音放送」は家族と聞きました。

学校にもどると、予科練や幼年学校帰りの先輩たちは、厳しい訓練に明け暮れた苦労の鬱憤をはらし、暴力をふるった教師はおとなしくなっていました。五月三日に新しい日本国憲法が施行、停止されていた社会科の授業が九月再開され、講師の老教師は文部省発行の『あたらしい憲法のはなし』を淡々と読み上げました。軍国主義から民主化への百八十度の転換でした。校名も昭和二十三年一年だけ龍ケ崎高等学校という時があり、旧制中学への入学者一・二年生は併設中学生となり、この時制定された校章が現在使われています。

龍中から龍高、竜一へ

疎開、終戦そして学制改革によりわたしたち同窓生にはさまざまな選択が迫られました。わたしたちは龍中四十六回・高校二回卒となっていますが、国民学校小学校高等科からの入学を含め、入学は一緒でも卒業が違っており、疎開での出入りもありました。昭和二十三年、戦後はじめての運動会には仮装行列の企画がありましたが、参加者は少なく、生憎の雨で中止の声も出ましたが、一組でもと国際結婚と銘打ち、わたしは女装の黒人の役を演じました。続く文化祭には演劇流行の風潮を反映して、わがクラスはゴーゴリの「検察官」、となりのクラスは漱石の「坊っちゃん」。「検察官」は社会風刺を効かしたもので公演を前にして待ったがかかり、ストライキには発展しませんでしたが大きな騒動になりました。

白幡台に六年間

わたしたちと高3・4回卒の生徒は、同じ校舎で六年間大きな価値の転換期を過ごしました。思い出は旧校舎と講堂とともにあります。本校は明治三十三年（一九〇〇）創立、県立土浦中学校龍ケ崎分

校として大統寺を仮校舎に誕生、白幡台に移ったのは三年後のことです。講堂の設計は駒杵謹治。ゴシック・ロココ・バロックと様々な洋風建築洋式を駆使しました。昭和五十五年に講堂は解体されて、当時校長の蓮沼先生は保存の方法を考え、玄関バルコニーの部分を旧図書館入口に移築、白幡会館建設のため解体、最終的にプレハブ倉庫に移されていました。

同窓会「餅屋」今年も白龍祭に出店

同窓会校外幹事　大野　雅彦（高31回）

去る六月二日（土）、第三十六回白龍祭が一般の皆様に公開されました。当日は天候にも恵まれ、例年にも増して多くのお客様がお越しになり、生徒たちの力を結集させた出し物を楽しんでいらっしゃいました。

同窓会も飛龍館の前のスペースをお借りして餅つきを行いました。この餅つきは、大和佐知雄さん（高二十八回卒　現同窓会副会長）が平成二十一年度にPTA会長をされた際に、PTAの本部役員が中心となって出店したのが始まりです。その後、白龍祭に少しでも華を添えられればと、同窓会の出し物として平成二十七年度から毎年行っているもので、今年で四年目になります。参加者も年々増えて、今年は約五十名の同窓生が運営に携わってくださいました。当日は、同窓生の他にも、生徒たちや一般のお客様にも餅つきを体験していただくことができました。販売した餅は、すべて臼と杵でついたつきたてで、きな粉餅とそべ餅の二種類を用意しましたが、飛ぶように買っていただき、六百食を完売することができました。また、収益金は、生徒会に寄付させていただきました。

私は、今年初めて参加させていただいた身分で偉そうな事は言えないのですが、同窓生や生徒たちの元気な姿を拝見でき、とても有意義な一日となりました。来年も計画しておりますので、より多くの皆様のご参加をお願いいたします。

最後に、ご協力いただきました皆様、用具一式を快くお貸しくださいました龍ヶ崎市社会福祉協議会の皆様にお礼を申し上げまして、今年の報告といたします。

佐倉高校訪問記

同窓会監事　山田　實（高26回）

平成30年8月24日に染谷会長ほか3名の同窓会有志で千葉県立佐倉高校を訪問し、同窓会運営の情報交換を行ってきました。ご存知の通り同校は長嶋茂雄巨人軍終身名誉監督の母校でもあります。（監督在校当時は校名が「佐倉第一高等学校」でした）

佐倉高校は、佐倉藩の藩校が始まりで、その後に私立中学・県立中学を経て県立高校とつながる約２３０年の歴史を持つ学校です。同校の記念館（旧佐倉中学校本館）は明治43年に建築されたもので、国の有形文化財に登録されており、補修等を加え現在も事務棟として利用されています。なお、現在の本館は、千葉県内最古の鉄筋校舎であり、県立移管１２０周年となる来年に向け建て替えの要望をしているとのことでした。

佐倉高校の同窓会は、「鹿山会」との名称で活動しており、独特の活動としては、藩校当時からの蔵書一万冊以上（「鹿山文庫」と称しており、県の有形文化財に指定されている）の保存管理等を担っており、平成20年にはその功績に対し文部科学大臣より表彰されています。また、年一回開催される「全国藩校サミット」への出席があります。

同窓会館はありませんが、鹿山文庫の保存・展示等を主目的とする「地域交流施設」があり、展示室の案内役も同窓会で行っております。この施設の一画に長嶋茂雄のコーナーも設置されておりました。

通常の同窓会活動は、地域・職域・クラブOB・同期会からなる30の支部等を中心に行われています。また、評議員会が設置され、総会に提出する議案の審議等を行っており、各支部及び同期会等から選出された約70名の評議員で構成されています。

来年は「県立移管１２０周年事業」を行うことを決定しております。

本校同窓会と同様に、総会への一般会員の出席者をいかに増やすかに苦慮しており、現役高校生による催しやOBによる講演会を行うなどの施策を実施していました。

今後については、いかに若い世代の会員に同窓会活動へ参加してもらうかが課題であるとの認識で一致し、引き続き情報交換を行っていくことを約し、同校訪問は終了しました。

特別投稿

私の原点を訪ねて

高34回
野口麻矢子

今年の夏の甲子園を沸かせた秋田県の金足農業高校野球部の試合を見て、思い出したのは我が母校、竜ヶ崎第一高校の野球部である。

忘れもしない。昭和54年、1979年の夏。全国高等学校野球選手権茨城大会で竜一野球部は熱い試合を展開しながら勝ち進み、決勝戦で明野高校と対戦した。甲子園出場がかかった試合だったが、残念ながら涙をのんだ。金足農業高校と大阪桐蔭高校の決勝戦を見て、その時を思い出した。当時の皆さんは元気だろうか、どうしているだろうかと考えた。時折私は自分の原点を訪ねるために母校のホームページを見るのだが、今回はそれと同時に白幡同窓会についても読んでみた。親友の名前も見つけて嬉しくなり、最近すっかりご無沙汰しているので、どうしたら連絡を取れるのかと思案した。私の方からも積極的に連絡を取っていなかったのだが。検索すると、そこには白幡同窓会への連絡先メールアドレスがあり、思いきって同窓会会報を送っていただけないかと同窓会事務局宛にメールした。送信した翌日に事務局担当者様からご返信があり、会報を自宅まで送ってくださるとのことだった。もしも、同窓会が形骸化していたらこのように迅速な返信は来なかったであろう。ちゃんと機能していることに安堵した。

いつ見ても、竜一のHPはいい。校舎へと続く桜並木の坂道。誠実、剛健、高潔、協和の校訓。ともすれば挫けてしまいそうな心に喝を入れてくれる。あの頃の自分、先生方、友達に怒られそうな気がする。竜一の卒業生として恥ずかしくない生き方をしているかと自分に問いただす。自分にとっての原点への旅である。単なる懐古主義ではない。未来に希望を持ち、夢を抱き、友と語り合った日々に戻れるのだ。戦争の悲惨さや平和の尊さを学んだあの日々。今の日本は危ういなと感じる今日この頃。自分に何ができるのか、を考えるといつも、そこには竜一がある。

日本国憲法が改憲されるかもしれないというこの今にあって、私はそれを看過できない。自分を強く持ち、世間に流されず、一人でも意志を貫こうと決意している。それが竜一高への恩返しであり、約束なのだ。

この度、同窓会事務局ご担当者様から原稿執筆のご依頼があり、数々の貴重な経験をふり返ったり、今大事なことを再認識する機会に恵まれました。厚く御礼申し上げますと共に、皆様の一層のご発展とご活躍をお祈りして筆を置きます。

竜ヶ崎第一高等学校に幸あれ!!

応援メッセージ

吹奏楽部23年ぶりの東関東大会出場

高63回
伊藤　卓世

この度は23年ぶりの快挙、東関東大会出場おめでとうございます。現役時代をふりかえると「東関東大会出場」という目標を部室の壁に掲げ、仲間と日々練習に励んでいたことを思い出します。最後の県大会では出場校と僅差で点数及ばず、悔し涙とともに出場への夢を後輩たちに託しました。

卒業してからは野球応援の賛助演奏という形で吹奏楽部のサポートを続けていましたが、今年の夏、パートの現役部員から県大会金賞獲得と東関東大会への出場決定の連絡をいただいた瞬間は、心が弾みました。諸先生方、みんなの夢を結んでくれた後輩たちには、感謝の気持ちでいっぱいです。

東関東大会当日は、多くの吹部OG・OBの有志が応援に駆けつけたと聞いております。私は残念ながら所用があり 赴くことができませんでしたが、今もかわらず応援してくれる先輩方がいることに大変嬉しく思います。

卒業して8年が経とうとしていますが、この竜一吹奏楽部でかけがえのない仲間と過ごした3年間の思い出は、社会人になった今も色褪せていません。思い出すだけで元気が湧いてきます。現役部員の皆さんも、そんな充実した竜一吹奏楽ライフを過ごせますように、仲間と楽しく音楽ができますように、その思いでおりますので、これからも吹奏楽部OG・OBをどんどん頼ってもらえたら幸いです。

そして、皆さんのさらなるご活躍をいつまでも心より応援しています。

第4回旧職員会開催

六年前発足した竜一旧職員会（隔年実施）の講演会・研究発表が十一月十七日に飛龍館で開催されました。

第一部の講演会は旧職員で山が大好きな松本君代先生による「私の山歩き」をテーマにした楽しいお話でした。

山に魅せられ、これまで国内外の山々を歩かれた豊富な経験について、

いろいろなエピソードと写真を交えながら山歩きの魅力についてお話してくれました。

中でも特に、女性として世界で初めて世界の最高峰エベレストへの登頂を成功させた田部井淳子氏との偶然の出会いや地理教諭から地学教諭への変遷などは、とても興味深いお話でした。いつも元気で若々しい松本先生の原動力の源がよく理解できた講演会でした。

第二部では、竜一高生による発表が四つありました。「SSH探究活動の報告」の二件と「文系探究活動の報告」の二件でした。関連する内容が会報にも掲載されていますのでご覧ください。

また、総会並びに懇親会は、会場を一高下のアイガーデン下平に移し、開催しました。

現職の先生も含め、六十四名の参加者が一堂に集い、総会において、会長が大野英二先生（高11回）から、岡野満先生（元竜一校長）に引き継がれました。

懇親会では　橋本忠一先生（高9回）の旧職員代表挨拶の後、講演をされた松本君代先生の乾杯の発声で会が始まりました。旧交を深め和気藹々の懇親の時間を大いに楽しみました。各テーブルごとの代表者スピーチも大変盛り上がり、最後は岩崎卓士先生による竜一の発展を祈念したエールで会を閉じました。

竜一旧職員会のコンセプトは、他校の会とは異なり、過去に務めた学校を訪れ、在校生や現職教員と触れ合い、竜一の今を実感することと旧職員の親睦を図ることにしています。

なお隔年実施の次回旧職員会は、二〇二〇年が創立百二十周年記念式典を予定しているため、第5回旧職員会は二〇二一年に開催するとこになりました。

追記

ご都合で欠席された元事務職員の尾形文子様からは、今回も過分なるご芳志を頂戴しました。厚く感謝申し上げます。

倉持　正男（高27）

史上初2度目の3冠を目指して

青山学院大学　駅伝部
主将　森田　歩希（高67回）

平成30年10月8日の第30回出雲全日本大学選抜駅伝競走では3区を走り、区間2位でした。チームは2年ぶりの優勝をすることができました。3冠を狙っている中でまず最初の出雲駅伝を勝つことができたのは良かったです。

平成30年11月4日の第50回全日本大学駅伝対校選手権大会では7区を走り、区間2位でした。チームも2年ぶりの優勝をすることができ、2冠目を達成することができました。

個人としても出雲から全日本へと状態も上がってきているので箱根駅伝に向けてさらに状態を上げていきたいです。

そして、チームとして史上初2度目の3冠を達成したいと思います。また竜ヶ崎一高に恩返しができるようにさらに活躍していきたいと思います。

全日本大学駅伝で7区を力走

白幡同窓会ホームページ紹介

白幡同窓会では竜ヶ崎第一高等学校のホームページとは別に、独自のホームページを公開し、様々な情報を発信しています。URLは次のとおりです。

このQRコードを読み取ってアクセスすることもできます。

http://www.shirahata.sakura.ne.jp/

ホームページでは、年1回12月に発行している本同窓会報が25号（平成25年発行）から最新号までご覧いただけます。「竜一ギャラリー」のコーナーでは「竜一コレクション」と称し、旧制中学校3回卒業の永田春水氏をはじめとして竜ヶ崎一高を卒業されて活躍された芸術家や竜ヶ崎一高に関係のある芸術家についての紹介をしています。本館1階廊下に展示されている作品もありますので来校の際にはご覧いただきたいと思います。「ニュース・トピック」のコーナーでは本校の硬式野球部の活躍をはじめとして、竜ヶ崎一高に関する様々な情報を同窓会の視点からまとめて掲載しています。毎年4月に行われている同窓会総会の様子や白龍祭に出店している同窓会の餅屋の状況についてもそこで報告させていただいています。さらに、リレー連載「世界に広げよう！同窓生の輪！」が昨年度スタートし、卒業生の方々から高校生時代の思い出について寄稿していただいております。白幡台の木々についても記事を掲載しており、白幡台の樹木のウェブ版マップ作りが完成しました。

これからも白幡同窓会ホームページは、ネットならではの特性を生かしながら、充実発展してまいりますので、ご覧いただき、ご意見をいただければ幸いです。

同窓会校外幹事　宮本　順紀（高32回）

進路状況

大阪大　1名
東北大　4名
九州大　1名
筑波大　20名

生徒達の素晴らしい頑張りと、本校独自の進路指導プログラム、通称「Rプログラム」に沿った丁寧な指導で、今年度も国公立大学に、121名の合格者を出すことができました。九年連続で安定して百名以上の合格者を出し続けています。十年目を迎える筑波大入試研究会も夏に行われる「入試問題研究会」と「冊子」の発行だけではなく、近年は月に一回ミニ集会を開いており、以前にも増して難化傾向にある筑波大入試においても、昨年は現役合格者だけで二十名の大台に乗ることができました。また難関大入試への指導体制も強化しており、惜しくも東大・京大の合格とはなりませんでしたが、徐々に最難関大を目指す生徒が増えてまいりました。浪人してでも最難関大にチャレンジしたいという強い意志を持った生徒達が増えてきたことは、進学校としてこれから更に進化する兆候であると感じます。そういった生徒達がこれから益々増えていけば嬉しい限りです。彼らの来春のリベンジにも期待しています。

昨年度より、卒業したばかりのOB・OG達に自分の受験勉強の体験や大学生活を後輩達に語ってもらうという「Rガイダンス」を、夏休み直前の六月末に実施しています。今年は二年生に対しても同様の企画を秋に実施することにしました。やはり、OB・OGからの声は生徒達の心に相当響くようで、最難関にチャレンジする生徒が増えたことの要因の一つとなったと考えています。全国の薬学部の中でも難関とされる千葉大薬学部への現役合格者が一昨年出たことで、昨年も諦めないで勉強を続けた女子が見事合格しています。今年、今度はその彼女の話を聞いた後輩達が勇気と希望を彼女からもらったであろうことは間違いありません。こういった連鎖が本当に楽しみです。

さて、皆さんもご存知のように大学入試が、現一年生が受験する年から大きく変わります。各国立大も変革を余儀なくされており、近隣の筑波大も大括り募集を始めると発表しました。大学入試が変われば、高校の授業も当然変わらなくてはいけませんが、本校進路指導部では、むしろこの流れをチャンスと見ています。

SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業も五年目という節目の年を迎え、二期目の申請を熟考中ですが、五年を経過した今、これまでSSH事業を通して培ってきた指導法があらゆる教育活動に転化し始めているのを感じるからです。今後全国全ての学校で展開されることになった「探究活動」も本校には既に五年間の実績があり、「英語四技能五領域」に対しても、SSHの学校設定科目として実施してきた「白幡英語」のノウハウがそのまま対応します。（更に英語外部試験は、本校では過去十年間、一、二年生が全員受験をしています。）入試改革が騒がれる中、これだけのアドバンテージが本校にはあるのです。この強みを是非進路指導にも活かしていきたいと考えます。

これまで大きな失敗をしたことのない者が、大学受験を乗り越えるということは、失敗の不安と戦い続けることでもあります。決して楽な道ではありません。しかし逃げずに、この壁を乗り越えることで、生徒達は大きく成長し、毎年いくつものドラマが生まれます。受験は団体戦です。生徒一人一人の進路実現に向け、全職員一丸となって最後の最後まで応援していきたいと思います。

寺田　義弘（高40回）

平成30年３月進路状況一覧

◆国公立大学合格者数

大学名	現役	浪人	合計
東北大	3	1	4
大阪大	1		1
九州大		1	1
東京外大	1		1
お茶の水女子大	2		2
筑波大	20		20
茨城大	41	3	44
埼玉大	6		6
千葉大	4	1	5
電気通信大	1		1
岩手大		2	2
山形大	2		2
信州大	1	2	3
群馬大	1		1
北見工大	3		3
横浜国立大	1		1
東京芸術大	1		1
東京学芸大	1		1
宮崎大	1		1
宇都宮大	1		1
琉球大	1		1
茨城県立医療大	7		7
首都大東京	2	2	4
高崎経大	2		2
秋田県立大	2		2
都留文科大	1		1
新潟県立大	1		1
県立米沢栄養大	1		1
千葉保健医療大	1		1
合計	109	12	121

◆主要私立大学合格者数

大学名	現役	浪人	合計
早稲田大	7	5	12
慶応大	2	1	3
上智大	2	2	4
東京理大	15	8	23
国際基督教大	1		1
青山学院大	8	2	10
立教大	10	10	20
明治大	17	8	25
中央大	13	3	16
法政大	16	5	21
学習院大	4	3	7
日本大	25	9	34
東洋大	19	5	24
芝浦工大	17	12	29
東京農大	17	2	19
東邦大	16	3	19
成蹊大	11		11
文教大	10	1	11
明治学院大	8	1	9
北里大	4	6	10
駒澤大	7		7
獨協大	6		6
国学院大	5	1	6
成城大	4	1	5
専修大	4		4
立命館大	4		4
同志社大	2		2
明治薬大	2		2
その他	210	13	223
合計	466	100	566

第67回読売教育賞

◇算数・数学教育部門 最優秀賞　受賞について

白幡探究Ⅰ【数学領域】

受賞式レセプションにて
左から、高円宮妃久子殿下、
谷川座長、小林教諭

代表　小林　徹也

1　はじめに

主に江戸時代日本で発達・普及した数学を和算といいます。吉田光由著「塵劫記」、「上毛かるた」に歌われる「和算の大家 関孝和」は有名です。伊能忠敬、間宮林蔵も和算を学び、偉業を達成しました。一方、本校における和算に関する教育活動は2009年に始まります。生徒1人が「算額」をつくる活動でした。この活動をこれまで本校全日制1年生1782名、定時制1～4年生172名、ひたち野うしく小学校6年生81名　計2035名に指導してきました。

我々はSSH指定の申請書作成段階から和算に関する探究を学校設定科目として提案し、準備を重ね、2014年より学校設定科目「白幡探究Ⅰ【数学領域】」において和算を題材とした探究を指導してきました。それに対しこの度、日本最高の教育賞ともいわれる読売教育賞最優秀賞をいただきました。これまでご指導、ご協力いただきました皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。本稿ではその指導概要、受賞式についてご報告いたします。

2　指導概要

(1)　指導教員について

これまで次の数学科教師がTTで担当してきました。

井坂　直樹　岡部　剛
軽部　清子　神坂　幸弘
木戸　崇智　木村　恵男
小林　徹也　染川　朋也
田上　一洋　中山　優吾

なお、SSH指定以前の「茨城版サイエンスハイスクール」指定中にはすべての数学科の先生方が関わっています。

(2)　指導内容

①数学史序論

学年当初の約4時間で和算の基本について学びます。まず、飛鳥時代から明治期までの我が国における数学・数学教育全体を1時間で学びます。次に江戸時代における和算の問題を解く活動を2時間程度行います。さらに本校地歴科小野威人教諭作成のビデオ教材で、伊能忠敬、間宮林蔵の偉業を取り入れた「海防」のための測量や和算の必要性を学びます。

②「算額」をつくる活動

「算額をつくろうコンクール」とはB4判の用紙に「問」問題、「答」答え、「術」解き方、さらに図や絵が書かれた「算額」を顕彰する活動で、「NPO和算」が主催しています。上位4作品は東京神田明神に奉納されます。近年本校では前々回第19回1名が最高の賞である金賞を、第20回では銀賞1名、銅賞4名が受賞しました。この「算額」作成指導が2時間あります。

③和算書の解釈と表現

解釈する和算書は、和算研究所の佐藤健一理事長にご呈示いただきました。

A　見立算法規矩分等集
B　算法勿憚改
C　算法闕疑抄

これらの和算書は現代語訳がないことが特徴です。

活動は1班5人単位で一学年56班です。各班班長1名、現代語訳担当・数学的内容担当・英語訳担当・デザイン担当を決め、2016年度から「江戸文化」係を加え、読み解く和算にある江戸文化について調べまとめる担当としました。

6月より約8ヶ月をかけて次の活動を主体的・対話的に行います。

ア　和算書の内容を現代語に翻訳
イ　現代語に翻訳された文章を現代の数学的な式や図に表現
ウ　現代語、数学的に表現したものを英語に翻訳
エ　内容をポスターに集約
オ　全員が各教室でポスター発表
カ　ポスターと「算額」の廊下への掲示
キ　「スーパーサイエンスハイスクール研究探究報告集」にポスターと算額をすべて掲載し1年生全員に配布。
ク　ポスターを全て本校ホームページからリンクを貼り、「和算ライブラリー」として閲覧可能にしました。（下記参照⬇）

3　受賞式について

受賞式は高円宮妃久子殿下ご臨席のもと11月16日（金）読売新聞東京本社よみうり大手町小ホールにて開催されました。講評では審査委員会座長・谷川彰英筑波大学名誉教授が9つの最優秀賞それぞれをひとことで形容されましたが、私共の指導を「すごい」と表現いただきました。また、その後のレセプションでは高円宮妃久子殿下より「私も和算を解いてみました」と直々にお言葉を賜りました。とても光栄なことと存じます。

4　これから

本校における和算探究は本校生徒への影響の他に「数学を題材とした探究活動の増加への寄与」と「和算研究の内外への一助になること」が期待されます。なお、春頃には正式な報告書が読売新聞ホームページに公開されますので、詳しくはそちらをご覧下さい。

SSH

2期目を目指して

SSH部長　大西　武彦

日頃より、本校の教育活動に多大なるご支援、ご協力を賜り感謝申し上げます。

スーパーサイエンスハイスクール（以下SSHと略記）について、既にご存知の方も多いと存じますが、概要を説明させて頂きます。SSHとは文部科学省が科学技術や理科・数学教育を重点的に行う高校を指定する制度のことで、平成14年度の小泉内閣時代に構造改革特別要求として約7億円の予算で開始されました。初年度の平成14年度は26校が選定されました。本県で初の指定を受けた高校は、翌平成15年度の竹園高校でした。当時の指定期間は3年間で、平成17年度の指定校から指定期間が現行の5年間となりました。政権交代後の民主党政権下においても予算が増額され、指定校の数は約200校となりました。平成23年度予算では約24億400万円が配分された後はほぼ同額維持となり、平成30年度予算では約22億190万円が配分されています。

指定を受けた学校は、若干の変動はありますが5年間で6,000万円の研究費を使うことができます。国のお金を教育の最前線の現場で直接使うことができるということは画期的ですが、使途には厳しい制約があり、手続きも膨大です。具体的な使途を一部挙げますと、大学で使うような高度な分析機器や、実験用部材を作成するための3Dプリンター等の購入費用、大学や研究所の先生方をお呼びして講演会等をする際の謝金や交通費、校外の生徒研究発表会や研究のためのフィールドワーク等に竜一生を参加させるための参加費用や交通費、発表用のポスターを印刷する大型プリンターやそれらの消耗品等の購入費等々…と多岐にわたります。会計等の事務処理を専門に行う事務員の方に来ていただく人件費にも使うことができ、本校卒業生の方に煩雑かつ膨大な事務処理を日々行っていただいています。

竜ヶ崎一高は平成26年度から5年間の指定を獲得し、研究開発課題に「協働的探究活動によるたくましい科学的人材育成のカリキュラム開発」を掲げ、様々な事業に取り組んできました。1期目の最終年度も、あと残すところ数か月となりました。この5年間で生徒はもちろんのこと、携わった教員にとっても大きな成長の機会となりました。5年間で得た成果の一部をご紹介させて頂きます。

SSH事業の最も中心となるのは、課題研究授業の開発です。1年生全員が取り組む探究活動を「白幡探究Ⅰ」と名付け、週2時間を設定しています。その内の1時間を「数学領域」とし、グループで「和算」の原文を現代語にし、現代の数学にし、英語にし、生徒研究発表会で1年生全員が発表します。校内発表では力を合わせてつくり上げたポスターの前でいきいきと発表する1年生、その発表に一日の長がある2年生から厳しくも温かい質問が投げかけられます。クラスメイトとの協働であり、学年の垣根を超えた協働がみられます。「白幡探究Ⅰ」のもう1時間は「理科領域」とし、7名の理科教員が同一の時間に7クラスそれぞれで実験・自習中心の授業を展開します。4時間で完結し、次の5時間目はクラスを変えて実施していくことで、1年生全員が1年間で7種類の実

ひたち野うしく小学校にて「算額」の指導

龍ケ崎小学校にて自由研究のアドバイス

伊豆大島の宿でサンプルの分類

校外（大阪）の発表会（マスフェスタ）での質疑応答

校外（東京飯田橋）での和算の発表

験・自習を体験することができます。名付けて「レインボーサイエンス」。生徒の人気が最も高い学校設定科目です。このようにして、文理を問わず1年生は全員が探究活動を行います。

２年生からは理系の１クラスを「ＳＳクラス」とし、週２時間の本格的な探究活動「白幡探究Ⅱ」を行います。研究したいテーマが似たもの同士でグループとなり自分たちで合同の研究テーマを決定します。「自分たちの力で研究できるかどうか」「必要経費が高額にならないか」「具体性があるか」などの要件を満たせば、教員から研究実施の許可がおり研究がスタートします。仮説を立て検証実験を行いますが、たいていは予期しない実験結果となります。再度仮説を立て実験方法を検討し実験準備、そして実験…。結果はまたもや予想外…。この繰り返しで生徒たちはくじけそうになりながらも、鍛えられていきます。ある程度データがたまってくると、その中に想定外のストーリーが見えてきます。その時の感動と興奮！自分たちの力で発見できた貴重な体験です。するとその発見を伝えたい気持ちになってきます。複雑な情報を分かりやすくまとめ、ポスターや発表原稿をつくり発表練習、そして晴れ舞台での発表です。

長々と書いてしまいましたが、「白幡探究」でのたくさんの経験を通して、生徒たちは仲間と協力することの有効性を知り、授業等で得た知識をつなげ活用する経験を得ることができます。この経験が大学というさらなる学びの場をより有効に生かし、変化の多い未来社会において活躍できる人材となるきっかけとなるよう願っています。実際に生徒たちは我々教員の予想以上に「たくましく」なっていきました。中には発表機会を自分たちで探してきて、連れて行ってほしいと申し出る生徒もいました。「打てば響く竜一生」を実感しています。

このほかにもご紹介したい事業がたくさんあります。ハワイの特色ある自然でのフィールドワークを行う「ハワイ島研修」、数学の研究をしている校内外の生徒と指導されている先生方が集まる数学三昧の合宿「ＭＡＴＨキャンプ」、周辺の小中学校へ竜一生が教師役となって行う出前授業「サイエンスキャラバン」…。それぞれの取り組みに生徒たちはいつも全力で取り組み、多くを得て成長しています。

来年の２月23日（土）には１年生と２年生の全員がポスター発表を行う「生徒研究発表会」を本校にて開催します。

また、この同窓会報がお手元に届くころには、２期目の申請文書が県を通して文科省に提出されています。１期目で得た成果をさらに拡充し、課題研究と他の様々な教科との連携を深めることで相互の質を高められるようなカリキュラムの実現を目指したいと考えています。

海外の研究発表会への参加も実現したいと考えております。そのような機会をご存知の方がおりましたら、ＳＳＨ担当大西までご連絡ください。

生徒にとって竜ヶ崎一高がより素晴らしい学びの場となるよう、教員一同、力を合わせて尽力していきたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願いいたします。

久保台小学校にて小学生に算数を指導

伊豆大島でのフィールドワーク

数学を研究している生徒と指導している
教員による合同合宿（MATH キャンプ）

筑波大学院生と数理モデルの研究

文系探究活動

歴史の探究活動を支援して

地歴科　小野　威人

探究活動の一環として歴史、特に日本史の活動についてこの三年間で取り組んできたことを紹介します。文系の探究活動は、主に二学年で設定されている「総合的な学習の時間」での発表を目標に行っています。きっかけは、三年前二〇一五（平成二十七）年度に、授業を担当していたクラスの担任から「探究内容を英語でプレゼンテーションする。ついては歴史をテーマに活動を希望する生徒たちを指導してほしい」との依頼を受けたことです。ほどなく、希望者四名を連れて江戸時代の思想家が残した史料の調査に行きました。調査に刺激を受けた四名は、「頂行伝―常総市水海道の埋もれた思想家を発掘する―」というレポートをまとめました。江戸時代に水海道で不二道と呼ばれた道徳的実践を志す団体の中心的存在であった鈴木頂行について論じたものです。

鈴木頂行研究（2015年度）

講堂研究（2016年度）

レポートの執筆中、調査地だった常総市水海道地域において鬼怒川が氾濫して水害が発生、生徒たちの調査した場所が被災しました。生徒たちは、「自分たちにできることはレポートを完成させること」と意気込み、原稿を完成させました。このレポートは東京都板橋区教育委員会が主催する第十四回櫻井徳太郎賞に応募、全国で一番の評価となる最優秀賞をいただきました。

二〇一六（平成二十八）年度の研究は、本校にかつて建っていた講堂の存在に興味を持った五名によって執筆された、「『まぼろし』の講堂を追って―竣工、解体、そして伝説へ―」です。本校に残る明治時代の設計図を基に、講堂の歴史を振り返った研究です。同じ設計図により建てられたとされる太田一高の旧講堂を実測して関連性を証明した画期的な取り組みになりました。この研究も第十五回櫻井徳太郎賞に応募、二年連続で最優秀賞をいただきました。

二〇一七（平成二十九）年度は、本校倉庫から新たに木造校舎の設計図が見つかったことをきっかけに、二名の生徒が本校の男女共学化過程を調べた「『竜一』物語、木造校舎に眠る記憶―昭和三〇（一九五五）年に入学した女子生徒の高校生活から男女共学化の歴史を探る―」を執筆しました。特に高校十回卒業の方々の協力を仰ぎ、当時の学校生活をお聞きして内容を構成したものです。第十六回櫻井徳太郎賞に応募して、二番目の評価となる優秀賞をいただきました。

併せて、二〇一七（平成二十九）年度から、龍ケ崎市役所の取り組みに協力して地域の歴史、特に「竜鉄」の名前で親しまれている関東鉄道竜ヶ崎線の歴史を調べています。二〇一八（平成三十）年の2月から3月にかけて「『竜鉄』の歴史を探る」と題した展示会を、市役所および市内の商業施設であるショッピングセンターサプラで実施しました。また、六月には本校文化祭でも「『竜高』、『竜鉄』の歴史」と題した展示を行いました。

二〇一八（平成三十）年度は、計十七グループが、夏休みの日本史の課題としてレポート作成に取り組みました。生徒たちは各所を訪ね、多くの方々の協力をいただきながら調査を行いました。その結果、関東鉄道竜ヶ崎線の研究、本校講堂の研究をはじめ本校出身の歌人として名をはせた大野誠夫研究、海外と日本の物語の類似性を時代ごとに検証する研究など多様なテーマのレポートが仕上がりました。

完成したレポートのうち画期的な研究については、第十七回櫻井徳太郎賞に応募するとともに、今後一枚のポスターにまとめ、総合的な学習の時間において成果発表を行う予定です。次に、探究活動に取り組んでいる生徒たちの声を取り上げてみました。

今後も、生徒たちの知的好奇心を喚起すべく支援したいと考えております。同窓生の方々のご支援ご協力をいただければ幸いです。

二年間の探究活動を振り返って

二年　田口　周平

男女共学化過程の研究（2017年度）

僕が「文系探究活動」に参加したきっかけは、竜ヶ崎一高に入学して間もない頃、新入生歓迎会での先輩方の発表によりこの活動について知り、自分も様々な探究を行ってみたいと考えた事です。先輩方が自身の探究の成果をま

とめた論文が全国で一番の評価を受けたと聞き、強い憧れを感じました。

僕が活動に加わってから初めて探究したことは、「第二次世界大戦後に学制が変化した直後の竜ヶ崎一高の女子生徒の学校生活について」です。一つ学年が上の先輩一名と共に調査を行いましたが、その際、多数の同窓生の方々の御好意により聞き取り調査を通じて当時の学校生活・行事、入学の動機や通学方法などについて、具体的な情報を得ることができました。竜ヶ崎二高との比較などをしながら調査結果を論文にまとめ上げ外部機関に応募したところ、全国で二番という評価をいただき大変嬉しく感じたとともに、良い経験を得る事ができました。

次に探究したことは、「関東鉄道竜ヶ崎線の歴史について」です。「竜鉄」という愛称をもつ当路線の歴史についてまとめられた文書は多くないため、自分たちで調査したものをポスターにまとめ、展示会を開くことにしました。市役所と市内の商業施設「サプラ」、竜ヶ崎一高の文化祭で都合数週間にわたって展示したところ、複数のメディアに取り上げていただいた事もあり、東京などの遠方からお越しの方々を含む大勢の方々にご来場いただきました。

また、昨年度に引き続き「竜鉄」の調査を行いました。同級生二名と共に「竜鉄」の開業時（竜一高の創立と同年）のこと、そして短い路線にもかかわらず百十八年という長期にわたり存続できている理由について調査し、最終的には、龍ケ崎という街の積極的な関わりが大きな影響を与えていると考察することができました。

前年度は有志の二名を主とするメンバーによる活動でしたが、今年度は日本史を学ぶ生徒による複数の班がそれぞれ設定したテーマに沿って活動する形態になりました。各々が、「竜ケ崎一高」や「竜鉄」などを含む多種多様な題目について積極的に探究している様子が見られました。

こうした活動の中で、同窓生の方々に御協力いただいた場面は数知れず、聞き取り調査の中で得られた知識は計り知れないものでした。この場をお借りして感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

探究活動との関わり

二年　今泉ななみ

白龍祭展示会スタッフ（2018年）

私たちの活動の始まりは、六月の文化祭の頃からでした。小野先生の声かけのもとに集まった生徒とともに、今はなき竜ヶ崎一高の講堂や「竜鉄」に関する展示会を実施しました。私自身、講堂の存在や「竜鉄」に関してほとんど知らなかったのですが、展示会の準備を進めていく中で興味を持ち始めました。文化祭当日にいらしてくださった卒業生の方々からお伺いした当時の竜ヶ崎一高や「竜鉄」の様子は今と全く異なっていて、大変驚きました。また、竜ヶ崎一高の知られざる一面に触れることができたのは嬉しく、とても楽しかったです。

展示品の中で私が最も印象深かったものは講堂の設計図です。設計図はとても古いものですが、保存状態が良く、展示の際に触れた時は竜ヶ崎一高の歴史に近づくことができたように感じました。

その後、日本史の探究活動では、共通の興味を持った友人たちとグループを作り、調査を進めてレポートにまとめました。私は以前から興味があった日本文学の面から歴史を振り返ることにしました。夏休み前から、各々のグループで題目と活動計画を決め、夏休みにはフィールドワークを行うことで探究を深めることができました。夏休みが終わると、それまで調べたことをレポートにまとめて提出するという流れで活動してきました。

私たちのクラスでは、題材に「竜鉄」を選んでいるグループもありましたし、調査の結果、「結論が出なかった」ことをまとめとするグループもありました。しかし、結論が出なくても、自分の興味あることに全力で取り組んで得られる充実感や達成感は何物にも代えられない深い学びとなりました。レポートは四千字から一万六千字でまとめなければいけなかったのですが、字数をオーバーしてしまったり、同じグループで文体が合わなかったりと取りまとめに苦労しました。そこで、休み時間や放課後を用いて、コンピュータ室に集まり、何とか完成させることができました。

これからの活動は、自分の国の歴史や竜ヶ崎一高の歴史についての理解を高めるのに大いに役立つと思います。

大野誠夫伝を執筆して

二年　妹尾　真佑

大野誠夫研究（2018年度）

私は日本史クラスの探究活動として、これまでに白龍祭

での竜ヶ崎一高、「竜鉄」に関する展示を行ってきました。この活動を通して改めて竜ヶ崎一高は歴史ある伝統校だということを実感することができ、とてもよい経験になりました。

そして今回、私たち五人のグループは、旧制龍ケ崎中学校出身の歌人、大野誠夫について研究を行いました。私たちは校内に大野誠夫文庫、歌碑があることに気づき、これをきっかけに大野誠夫について興味を持ちました。大野誠夫（以下、誠夫と記します）は作品を数多く発表し戦後の短歌界をリードしてきましたが、現在、誠夫について知る人は限られており、私たちはなぜこれほどに誠夫が忘れられてしまったのか疑問を持つようになりました。

そこで、誠夫について詳しく知るためにフィールドワークを行いました。竜ヶ崎一高の卒業生である染谷信洋同窓会長はじめ、愛国学園高校長の倉持正男先生、誠夫に詳しい郷土史家の鈴木久先生への聞き取り調査や、生家、歌碑の現地調査、本校の「校友會誌」などを読み、誠夫の人生や作品について調べました。

誠夫は大正三（一九一四）年、稲敷郡生板村藤蔵河岸（現・河内町竜ヶ崎町歩）に生まれましたが、幼いころに里子に出され、病気を患うなど波乱万丈な人生を送りました。彼は『薔薇祭』をはじめとする多くの歌集や著書を残し、戦後には現代歌人の三羽ガラス（近藤芳美・宮柊二・大野誠夫）と称され、当時の活躍は受賞した賞の数々からもうかがえます。

私たちは旧制龍ケ崎中学校時代に誠夫が詩歌に取り組むきっかけとなった国語教師の長南先生や詩人澤ゆきさんとの出会いを調べ、彼らが誠夫の人生に及ぼした影響について考察しました。また、「校友會誌」からは学生時代の誠夫の作品を発見し批評を行いました。さらに歌碑建立の経緯を調べることで、誠夫の作品を愛する人々の存在や、地域の人々の誇りとなっていることがわかりました。

今回の私たちの調査で、多くの魅力を持つ歌人大野誠夫がより評価され、さらに多くの人々に知られるきっかけとなればよいと思います。協力していただいた皆様、ありがとうございました。

「竜鉄」と「龍ケ崎」百十八年の歩み

一年　増子　絢音

「竜鉄」の研究（2017年度～）

私が今回の研究で題材とした関東鉄道竜ヶ崎線（以下「竜鉄」と表記する）は、今年で開業から百十八年を迎えます。研究では「『竜鉄』が百十八年間存続できた要因を考察する」ということを主なテーマとし、文献調査と聞き取り調査を通じて、「竜鉄」と「龍ケ崎」の関係性や軌道工事の回数などから「竜鉄」の歴史を探りました。

今回の研究を通して感じたのは、「情報が本当に正しいのかどうか批判的な姿勢をもって検討する」ということの大切さです。「竜鉄」の歴史に関する情報は主に文献から得ていました。文献の中には私論が含まれていることが多く、どこまでが事実でどこからが筆者の考えなのかを見極める必要がありました。また、「竜鉄」が開業した時代の鉄道に関する法律についても調べたため、「竜鉄」の歴史の変化を時代背景とも重ねながら考察をしました。複数の視点から「竜鉄」の歴史を見ることで新たな考えの発見や、より精度の高い考察結果を示すことができたと思います。

今回、研究を進めるにあたって、龍ケ崎市が企画した「関鉄レールメイトと行く、竜ヶ崎線　明治とふれあう街歩き」にボランティアとして参加しました。このイベントは、明治維新から百五十年を迎えた節目として、龍ケ崎市内の歴史的遺産にふれ、鉄道沿線の歴史を再発見し、イベントの参加者に「竜鉄」を通して地域特性の認識と理解を促すという目的のもと実施されました。イベントに参加した際には、高校の先生をしている方や「竜鉄」の歴史に詳しい方などたくさんの方々にインタビューをしました。このイベントには意外にも龍ケ崎市外からの参加者が多く、逆に龍ケ崎市内からの参加者が少ないことが気になりました。そのため、「竜鉄」の魅力を龍ケ崎市外には発信できたと思いますが、龍ケ崎市内には「竜鉄」の魅力を十分に発信できていないという反省点もみつかりました。「竜鉄」の歴史を学ぶと同時に、歴史を伝承するうえでの問題点を知ることができたこの体験は貴重なものとなりました。

「竜鉄」は百十八年もの歴史を刻んでいますが、その歩みがこれからも止まることはないことを期待します。また、今回の研究を通じて培った知識をもとに、これからも「竜鉄」の歴史を探っていきたいと思っています。そして、龍ケ崎市はもちろん龍ケ崎市外のたくさんの方々にも「竜鉄」の魅力を発信していきたいと考えています。

部活動状況

ソフトテニス部

茨城県水戸市で行われた関東大会・男子個人の部に3ペアが出場しました。小林龍平（3年）・小林輝（3年）ペアは2年連続で、山瀬龍輝（3年）・飯塚和仁（3年）ペアと堤優斗（1年）・佐藤孝太郎（1年）ペアは初出場です。特に、堤・佐藤ペアは、高校生の大会に初めて参加し、地区予選・県予選を勝ち抜き、見事に代表の切符をつかみとったことは快挙です。男子個人の部で関東大会に出場するのは、今年で6年連続となります。

インターハイの県予選では男子個人の部でベスト16に3ペア、団体の部で第3位でした。惜しくもインターハイの出場権は得られませんでしたが、選手は自分の力を発揮して熱戦を繰り広げていました。

女子は1年生10人が入部し、日々の活動も活気あるものとなっています。県南新人大会団体の部で第3位に入賞しました。今後の活躍が楽しみです。

現在部員一同、全国大会に団体で出場することを目標にして日々練習に励んでおります。

最後となりましたが、生徒の活動を支えてくださる皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。

顧問　髙野　健二
新　友介

バスケットボール部

本校バスケットボール部は諸先輩方が築いてきた伝統を引き継ぎ、「文武両道」と「不撓不屈」をモットーに、県大会ベスト8入賞を目標に毎日練習に励んでいます。近年では男子が県大会ベスト8の常連校として活躍し、女子は以前のように県大会ベスト8に復活できるように奮闘しています。平成30年度は、男子が関東県予選と総体県予選でベスト16、女子は関東県予選に出場を果たしました。

本校バスケ部では、どうすれば少ない練習時間で私立の強豪校に勝てるのか、部員一人一人が主体的に考えながら活動しています。また、外部トレーナーの指導によるトレーニング内容の改善や、部員だけで行う部員会議、在宅部活の実施など、様々な試みで部の強化を図っています。

このような充実した活動ができるのも、学校・同窓会をはじめ、PTA、OB・OGの皆様、保護者の皆様のご支援のおかげであると感謝しております。今後ともよろしくお願いいたします。

顧問　大高　晃平

射撃部

8月に広島県安芸太田町「つつがライフル射撃場」で全国高等学校ライフル射撃選手権大会が開催されました。団体戦においては男子（3年柴原・宮本・渡辺）が全国第3位、女子（3年植地・2年峰・片桐）が全国第4位と男女揃って入賞することが出来ました。また、男子個人戦においては、ハイレベルなファイナル競技の結果、3年の柴原が全国第2位となりました。今回の経験を基に今後の大会に臨みたいと思います。最後になりますが、学校・同窓会をはじめ、PTA、OB、OG、保護者の方々のご支援いつも感謝しております。今後ともよろしくお願い致します。

顧問　出雲　辰雄

陸上競技部

竜ヶ崎一高陸上競技部は「継続は力なり」という意識のもと、関東大会や全国大会出場、そしてさらなる自己ベストの更新を目指して日々練習に取り組んでいます。今年度は3年生の神尾、中村の2名が関東大会に出場を果たし、最後まで諦めない心をチームに残してくれました。

現在、新人チームとなり、

3年生やこれまでのOB・OGの方々が築きあげたものをさらに高めようと努力しています。夏季休業中には長野県菅平で4泊5日の合宿を行い、寝食を共にすることで、チームとして大きく成長できました。新人戦、高校駅伝そして来季のインターハイに向けこれからも一丸となって部活動に取り組んでいきます。

最後にこの場を借りて、同窓会や保護者の皆様、諸先生方、OB・OGの皆様に日頃の活動の支援への感謝を申し上げます。これからも陸上競技部をよろしくお願いします。

顧問　内田　昌美
宮本　秀斗

柔道部

柔道部は文武両道を実践することを心掛け、「関東大会・インターハイ出場」を目標に、練習に取り組んでいます。OBには1964年東京オリンピック中量級金メダリストの岡野功氏がおり、強豪校としての伝統が今も受け継がれています。近年では平成22年、23年に女子個人でインターハイ出場、平成25年に男子団体で30回目の関東大会出場。平成30年は新人県大会で男子個人優勝、女子個人第3位となっています。新チームでも先輩に追いつけ追い越せと日々励んでいます。また、柔道を通しての人間力の向上を大切にし、畳の上だけでなく、学校生活でも己を磨くことを意識しています。最低限のことで満足するのではなく、より高い志を持って行動することで、一人の人間として成長することを目指しています。最後になりましたが、日頃より学校・同窓会をはじめ、PTA、OB・OG、保護者の皆様のご支援を賜り、感謝しております。今後とも宜しくお願い致します。

顧問　齊藤　健太

バレーボール部

日頃から、学校・同窓会をはじめ、PTA、OB・OGの皆様のご支援を賜り、感謝しております。

昨年、部員不足で大会出場ができない状況がありました。今年度は1年生が入部し現在の2年生4名が中心となって地区大会出場を果たすことができました。

現在は、まず県大会出場を目標に日々基礎的な練習を積み重ね、他のチームに引けを取らない状態になっております。チームの半分以上が未経験者でスタートしていますが、コツコツと練習に取り組み練習試合を重ね、バレーボールの面白さを理解し「勝ち」に拘りつつも、チームメイトや対戦相手へのリスペクトを怠らない、そんな竜ヶ崎一高らしいチームに育ってきています。

つい数年前までは関東大会出場、県大会ベスト4の常連でした。近年では近隣中学校の男子バレーボール部の減少の余波を受け、部員数の減少もありますが悲観することなく、諸先輩方が築いてきた伝統を引き継いでいきます。

顧問　市村　武士

吹奏楽部

吹奏楽部は文化祭や野球応援などの学校行事の他、依頼演奏・定期演奏会・各種音楽

会…年間を通して多くの本番を行っています。その中でもコンクールは重要な位置付けであり、本年度、本校は23年振りに東関東吹奏楽コンクールに出場することができました。コンクールは長い期間同じ曲を練習する中で、音楽と真剣に向き合い、乗り越えなければならない課題と対峙する自分との闘いでもあります。技術面だけでなく人間的にも成長できる意味でコンクールに出場することは意義があると考えています。近年、地区大会止まりだったため「県大会出場」が目標だった生徒が、地区大会で初日に1位という結果を頂いたことで意識や顔つきが変わりました。評価されるとは心に強い影響を与えるのだと実感しました。東関東大会では銅賞でしたが、「悔しい！もっと上手くなりたい！」という気持ちが、必ず来年に繋がると信じています。

最後に、今回の東関東大会出場にあたり、吹奏楽OBをはじめ同窓会・保護者の方々からは多くの声援・激励を頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。伝統ある竜ヶ崎一高吹奏楽部で演奏できることを誇りに思い、新しい歴史を刻む気持ちで取り組んでまいりますので、今後ともご支援よろしくお願いいたします。

顧問　森田　理沙

軽音楽部

十一月四日、東京都大田区蒲田「片柳アリーナ」にて、「We are Sneaker Ages 関東グランプリ大会」が開催されました。このコンテストは、関西で約四十年の歴史を持ち、関東では本年度で四回目を迎えます。四千人収容可能な大舞台で行われるグランプリ大会に、本校軽音楽部は約六十校の中から選出され、三年連続三回目の出場となりました。この大会の特徴は、バンド単位のコンテストではなく、部活動単位のコンテストであることです。ステージで演奏するメンバーだけでなく、他の部員も諸準備や書類作成、演奏メンバーへのアドバイス、本番での応援などを担い、部活一丸となってグランプリを目指します。様々な問題や困難を乗り越え、本番では現在の実力を出し尽くすことができました。そして、残念ながら入賞は逃したものの、協賛企業により最も輝いていた学校に送られる特別賞をいただくことができました。

このコンテスト以外にも、校内演奏会をはじめ、千葉県立東葛飾高校との合同演奏会、地元楽器店主催の県内高校生コンテスト、そして「ライスフィールドマーケット with 田んぼの学校」や「大和ハウス工業竜ヶ崎工場五十周年感謝祭」など地元のイベントへの出演など、学校内外で活動を行っております。生徒達は、様々な方と交流する機会に恵まれ、また演奏会の企画運営などを通して、演奏技術だけでなく人間力を磨いています。

このような充実した活動ができるのも、学校・同窓会・保護者の方々をはじめ、皆さまのおかげと心から感謝しております。今後ともよろしくお願いいたします。

顧問　髙野　陽輔

部活動の主な成績
平成30年4月～9月

☆関東大会以上
◎県大会（関東県予選・県総体）
○県南大会

運動部

硬式野球部
◎春季県大会……二回戦進出
◎第100回茨城県大会
……二回戦進出
◎秋季県大会……ベスト8

陸上競技部
☆北関東総体
男子砲丸投……神尾出場
男子円盤投……神尾出場
女子三段跳……中村7位
◎県総体
男子八百M……外岡出場
男子千五百M……白田出場
男子五千M白田、橋本出場
男子走幅跳……津崎出場
女子走幅跳……中村8位
女子砲丸投……加藤出場
男女4×百Mリレー…出場
男女4×四百Mリレー出場

柔道部
◎関東県予選

男女団体……出場
◎県総体
男女団体……出場
男子個人
……佐藤、野口ベスト8

射撃部
☆関東大会
男子団体……優勝
女子団体……4位
男子個人
……柴原2位、渡辺7位
女子個人
……峰3位、中屋敷6位
☆全国大会
男子団体……3位
女子団体……4位
男子個人……紫原2位

男子ソフトテニス部
☆関東大会
個人……小林・小林ペア、
山瀬・飯塚ペア、
堤・佐藤ペア出場
◎県総体
団体……3位

女子ソフトテニス部
○関東県南予選
団体・個人……出場
○総体県南予選
団体・個人……出場

男子バレーボール部
○関東県南予選……出場
○総体県南予選……出場

サッカー部
◎関東県予選……出場
◎県総体……二回戦進出

軟式野球部
◎関東県予選……出場
◎夏季県大会……出場
◎秋季県大会……出場

弓道部
◎関東県予選
男女団体……出場
男子個人……出場
女子個人一年生の部
……橘川2位
◎県総体
男女団体……出場

剣道部
◎関東県予選
男子団体・個人……出場
◎県総体
男子団体・個人……出場

硬式テニス部
○関東県南予選
男子シングルス……出場
男子団体……出場
女子団体……ベスト32
○総体県南予選
男子シングルス……出場
女子シングルス
……菅野ベスト32

卓球部
◎関東県予選
女子個人……出場
◎県総体
女子団体・個人……出場
○関東県南予選
男子団体・個人……出場
○総体県南予選
男子団体・個人……出場

ハンドボール部
◎関東県予選……出場
○総体県南予選……出場

バドミントン部
◎関東県予選
男女団体……出場
◎県総体
女子ダブルス……出場

バスケットボール部
◎関東県予選
男子……ベスト16
女子……ベスト32
◎県総体
男子……ベスト16

文化部

吹奏楽部
☆東関東コンクール
高校B部門……銅賞
◎県コンクール
高校B部門……金賞

書道部
☆高野山競書大会
毎日新聞社賞……仲久木
高野山書道協会賞……齋藤
☆高校生国際美術祭
奨励賞…荒井、齋藤、根本
仲久木、藤田
☆高円宮杯日本武道館大展覧会
参議院議長賞……藤田
東京都議会議長賞……荒井

写真部
☆全国総文祭
写真の部……山本出品

棋道部
◎春季県大会
団体……出場
個人……出場
◎竜王戦県大会
個人……出場
◎県総文祭……出場

軽音楽部
☆関東グランプリ大会…出場
◎茨城県高校生大会……優勝

英語部
○英語ディベート研修会参加

文芸部
○小説集「のひすはれ」の製作・発行
○詩集「画竜点睛」の製作・発行

美術部
○白龍祭ステンドグラス作成
○読書感想画コンクール出品

茶道部
○白龍祭……お茶会
○県高校生茶道部交流会参加

サイエンス部
○白龍祭…科学ミュージアム
○県高文連天文合宿……参加

定時制保健講話

10月24日「自分（いのち）を生きる～愛し愛されるために～」と題して、龍ケ崎済生会病院産婦人科医 陳 央仁先生にお越しいただき保健講話が行われました。定時制ではここ数年、陳先生に保健講話をお願いしています。この保健講話は1～4年生の全学年参加での保健行事です。4年生は、4回目の講演となり、生徒の中には毎年同じような内容との意見もありますが、敢えて聞いてもらっています。

それには理由があります。定時制の生徒たちの中には、残念ながら、自己肯定感の低い生徒たちが多くいます。陳先生は、講演冒頭に「今日の講演の終わりに、一人でも多くの皆さんが自分はかけがえのない存在であることを理解し、自分を好きになってもらいたい」と話されます。様々な事情で恵まれない環境であったとしても、親の愛を通して、いのち（自分）が生まれてきたということ。そのいのち（自分）を大切にすることで他者も大切にするという気持ちが生まれてくるというメッセージを熱く語られていました。

表題にある、愛し愛されるために生まれてきた存在であることを知ってほしいという願いから陳先生に講演をお願いしています。心の性教育を土台に現代の性の危険性についても分りやすく伝えていただきました。2時間という長い講演ですが、生徒達は、陳先生の言葉を真剣に聞いていました。「生きてるだけで100点満点。あなたはあなたのままでいい！」陳先生のこの言葉が子どもたちの胸に届くすばらしい講演でした。

養護助教諭　久保　美津

進路ガイダンス

七月十三日（金）、定時制ではキャリア教育の一環として進路ガイダンスを実施しました。生徒は、事前の希望調査に基づいて「大学短大コース」「専門学校コース」、「就職コース」は低学年、高学年に分かれ、それぞれの担当講師より進学コースでは進学後の学習内容や学生生活、入試情報などを説明していただきました。また就職コースでは高校就職の基礎知識の説明や、実践的な面接指導も行っていただきました。「入試や大学受験の意味など大事なことがたくさん聞けた」「身だしなみとおしゃれの違いがわかった」「面接のポイントがよくわかった」などの感想も聞かれ、生徒達の多くが真剣に取り組み自分の進路について考えていました。

教諭　吉野　健太

生活体験発表大会

平成三十年度茨城県高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会が、十月六日（土）に茨城県立水戸南高等学校で開催されました。生活体験発表大会は、定時制通信制に学ぶ生徒が定時及び通信制高校に通いながらの生活を通して、感じ学んだ貴重な体験を発表し多くの人に感動と励ましを与えることを目的として、長年にわたって実施されている行事です。今年の参加校は十六校、発表生徒は二十二名でした。

本校からは三年生の近藤矢愛（こんどうしちか）さんが「過去を振り返らず今を生きる」というタイトルで参加しました。

定時制への入学の決心と自己変革の目標、そしてその目標を達成するために取り組んだこと、そこで得たもの。近藤さんがしっかりと取り組んでいる学校生活の様子が発表されました。夏休み中はアルバイトが忙しい時期でもあり、そんななか、原稿を書き上げ、何度も手直ししていきました。九月に入ったら授業が終わってからの発表練習。少ない時間ながらも心を込めてしっかりと伝えるために、暗唱や表現の工夫など練習を重ねました。

大会では緊張しながらも、練習の成果を十分に発揮して、落ち着いて静かに語りかける素晴らしい発表をすることができ、本番に強い姿が見られました。残念ながら全国大会への進出はなりませんでしたが、聴衆を惹きつける発表になりました。奨励賞をいただいて参りました。

ご支援くださったPTAおよび同窓会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

教諭　吉野　健太

編集後記

今回は第30号の節目となる記念号として、学校側の紙面を大幅に増やしました。現役生徒の様子が同窓生の皆様に伝われば幸いです。

また、前回から「協力金」のご支援をいただいた方々の『協力金納入者芳名簿』を作成し、会報とともにお届けすることになりました。

今後とも同窓会活動につきまして、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

倉持　正男（高27）